





冬半
上

序

定家久少翁の山荘より集りて百人一首八本せれ
富書にて大お童も口號り走く事多く近代百人
一詩とも書あり又活版千首辨證の多きと集うて
百人一句と詠せむるに中興諸家百人一詩
もとあり又此後新撰百人一首とも写不出すり不
づく思ひて新古人の筆を残すて多きに見ゆる
高もあれば低くかうる貧匱もひき足と云はる
御幸之人御内侍御子と其の間の句人として名をと
本に思ひて和歌癸句成りて是れ集めて歌辨更
選と題してはかゆる耳と云ふ一秀透名句教養
ある所より教門を去るつゝと斗と撰いそ

書記へらぬはまよる年が多ひてかく風雅の道を以て
をも中しも忘れ多き門名とらまくへ被へまし人
乞食の名とあぐり玉簾湯を雪むと人ふるをひき
ひ鄙くもふと席上へまちとて文よ皆もみ取る
代れかす集うと僕人と了ほと載するの馬も
御く族人又は是と脚と緋の男越を物乞う族
意あく毛くあと擧げよけもま教句と夷謡す
れど山書れ半にまゆく西のからぬ事も向もゆき
主陽の即めそぞり又人跡と餘念づふ者遠す
あり又倭安至文字あも漢と安假名と附傳す事
見ゆるのいふをか一前く経とひくとまゆとれく
被ふとぞく前後混疑ひひよく書つて被ふと

佐ふとくも佐く吏ふ夙夜の道と見ゆる
タヘ
被ふ被ふチフ蒜の匂を吹き
ミクシウラセキハキモニテ

百人選目錄上卷

- 弟一
中門所長宗公
弟二
松永貞德翁
弟三
芭蕉翁桃青
弟四
重牛庵風老
弟五
寶井具角
弟六
舌門惟足
弟七
京郊六條
弟八
本四守日達上人
弟九
京後園梶女
弟十
赤井墨書直後
弟十一
盲人不忍齋
弟十二
雲池堂尾海
弟十三
樓川

上野

矛女三 寒松院

矛女文 傳川 奮智宗武久

矛女七

傳川

松平隱奥古奈村

矛女九

傳川

刑部少宗伊御

矛女十一

傳川

尾列宗春卿

矛女十三

傳川

太宗誠為忠相

矛女十五

傳川

力丸

矛女十七

傳川

漢人之妻也

矛女十九

傳川

情隨境了圓和尚

矛女二十

傳川

松平右近加賀元

矛女二十二

傳川

水玉

矛女二十三

傳川

松平友通松監素邑

矛女二十四

傳川

水玉

矛女二十五

傳川

本者庵老翁

矛女二十六

傳川

本者庵老翁

矛女二十七

傳川

本者庵老翁

矛女二十八

傳川

本者庵老翁

矛女二十九

傳川

本者庵老翁

矛女三十

傳川

本者庵老翁

矛女三十一

傳川

本者庵老翁

矛女三十二

傳川

本者庵老翁

矛女三十三

傳川

本者庵老翁

矛女三十四

傳川

本者庵老翁

矛女三十五

傳川

本者庵老翁

矛女三十六

傳川

本者庵老翁

矛女三十七

傳川

本者庵老翁

矛女三十八

傳川

本者庵老翁

矛女三十九

傳川

本者庵老翁

矛女四十

傳川

本者庵老翁

矛女四十一

傳川

本者庵老翁

矛女四十二

傳川

本者庵老翁

矛女四十三

傳川

本者庵老翁

矛女四十四

傳川

本者庵老翁

矛女四十五

傳川

本者庵老翁

矛女

後漢

乾升

矛女

後漢

福安庵起波

矛女

後漢

黑彌

矛女

後漢

自在庵祇延

矛女

後漢

韋月平妙

矛女

後漢

威童

矛女

後漢

大壯至蕃

矛女

後漢

加賀

矛女

後漢

羊素

矛女

後漢

千代

矛女

後漢

而里

矛女

後漢

本者庵老翁

歌詠百人選上卷

有德院殿吉家公

第一 詞つゝ一國のりひこちもる

百人一首の卷後天智天皇秋ノ因内御寄抄陽子之ノ迎代
御仁徳ありとく人而て吉宗公北沖源翁は度未出一ノ
作山御名れ公と上又文家後持ノム正徳六年夏晦日將軍
家継公御他界シテニキ御世継矣と伝シ御三家方
沙老牛四洋室の上紀列名を吉宗公御入主と云トと考
リ石の月是則正徳六年六月也門代を活持セシ間も
全く御領の民百姓爰々國口年貢を以て活此代官免

四年貞、而立相猶皆歸目祿、之全猶為高行經、而佛光中
一上其書符、而勝子識。而老牛公方樣、上事恒例
並、信、而夏成、而季貞、皆歸目祿、之。而老牛、全相猶、皆歸
至、家、公、上、事、之、而、君、是、之、而、一、至、代、之、清、經、一、間、之
不、可、無、也、不、此、而、君、是、之、而、一、至、代、之、清、經、一、間、之
一、民、而、收、之、而、君、是、之、而、一、至、代、之、清、經、一、間、之
用、之、而、君、是、之、而、一、至、代、之、清、經、一、間、之
用、之、而、君、是、之、而、一、至、代、之、清、經、一、間、之
辛、芳、來、為、之、而、君、是、之、而、一、至、代、之、清、經、一、間、之
以、我、安、之、而、君、是、之、而、一、至、代、之、清、經、一、間、之
清、經、一、間、之、民、而、接、育、之、而、君、是、之、而、一、至、代、之、清、經、一、間、之
而、之、圓、之、圓、之、甲、變、之、而、君、是、之、而、一、至、代、之、清、經、一、間、之
多、之、多、之、而、教、也、此、君、賢、而、事、之、享、保、祿、之、
多、之、多、之、而、教、也、此、君、賢、而、事、之、享、保、祿、之、

書、と、書、く、は、拂、て、天、智、天、聖、れ、而、公、と、せ、く、似、ま、れ、
書、と、書、く、れ、ま、れ、

第二

松水貞、徑、翁、

花、清、一、人、之、蓮、の、根、も、そ、

此、長、珍、也、貞、德、を、幼、り、ハ、余、能、也、と、て、連、考、り、拂、宿、宿、列、道、下、の、附、
家、道、の、路、す、り、禁、喜、子、天、上、人、口、号、清、一、向、之、伏、笑、て、主、席、ハ、
階、下、上、膝、仰、一、句、の、若、意、早、い、と、と、め、り、一、点、二、点、う、も、腰、
高、馬、く、も、る、と、傍、小、有、令、小、全、蓮、の、よ、く、所、と、す、を、し、
一、足、を、少、べ、一、つ、あ、見、る、も、く、み、り、深、く、今、又、動、て、川、里、も、も、
本、城、全、蓮、と、深、く、い、つ、此、時、貞、徳、は、蓮、の、角、と、吟、

まう蓮と花の君すくいをへてあまうかく牡丹を
花王といひ日をめでて様と花王といひ天竺ともい蓮
をもとつて花の源を本は工れまく信多の佛
菩薩度母とおもひてうる佛前又ま寺を下さり多く方わ
かの蓮と樺の皆人いそむくにまくわからて極へども
左よりはは清をあの宿を也年れ候くも歲もく
從一もやまとゆくは華経の文をも蓮のよまと述べ
樺も併せ一圓もくえこ門ねの智りくまも忍多をもゆ
くわがは津御湖も歳末年紙の日吉例も赤鶴く
樺を伸へてさくの間あり蓮と泥牛もくと山く
泥牛もくとて花の君びく一人を氏う育りと
えくくりのふ田支野人の子をうくると又育ひと

江戸吉原れ清をもくとゆき松三休綠と日と着
十種者ほんとうふの成廢をもとえと尋ねまく山家の水
呑更生の娘とて親の新妻と枚を娶りて本綿の水
嵩喜もくづ。亮もくひとぬ。朝廷と育られ後
太史と押立く天摺の綿の半うと目と出ももあ
一育柄ももれんびとじんじんあくもあもしも
あらしことむれと皆是養育の仕事より士農
工商もくと小ち蓮元のくくと持たるに何のうし
たゞく貰へくくとくとくと直すもく是は清貧とく
子跡り被とくとく衣とあく孤の衣ととくとくの申
あく信を脊負とくとく仙一かす因も叙り蓮と老
いえゆくもくはははははははは

つれさる山林波濤のあらうとも忠貞なるの心にて知し

毛根第三

謹明院殿掌靈大姉

名すふりうに都鳥う師

是を慎候院殿家重公のゆ簾中へと京於より下り比官様と
すまき果報づくふくよしくせとをほへはりすハ一と
隅田川を渡り一湯飲むりゆく感懐深く往叶
とさすくの四述懐の前あるも後年御不寧ありて
不吉の前兆となり人をさへつまひあひきも
かくらぐの事一此ゆきのゆき雪のよすり遙
言葉へゆりう將軍れゆ簾中に至るをうへ行一つ

湯御叶づるすはふくわざものとの句也名もむろ
うにとくゆきくへきき山里の都へゆけりか
ゆきゆゑゑるうくゆるへゆくゆく父母のうき風
ゆ慕のゆゆくゆ考ゆすゆ渡やくゆきり是くと
してひ工でくゆくゆとおと忘れてそ行時もあつて
ぬとくゆく女をよひこ役のうきくとて呂入格と志行
辦とくゆくはまゆくゆくふ差年と成て、處程も思
ゆきゆく身の様く人々をうんぢねとく方所とくゆく
ゆきゆくことゆくゆく御身もやまくぬゆあそひまわ
うして垣木の縁と女房の三役をとくとゆくや
う入を實を拂のゆきをう

道の多ひ本權を馬と食を乞

是も中興の祖歴をせば翁の句より以列栗津翁
義仲も小暮より三井浦も門人の達を石碑百
七拾余石と及ぼし山の谷底にせり師の名柄然ほ
其後も材子らむ而此の碑十数軒之者生得也其
多くより喧嘩只縁也はあ親類の外教主を公卿
小姓やく人主伴へ教門の事もやうやく一聲句に言ふが
弔の著せし祖後抄後集もうとてて取る
是れ翁門の事もさうなり本權も山半の涼舎へ嘆
たゞかくよきわらまもせんすも嘆むるを嘆むる

まふ道場へ出張く嘆をむかへ馬の馬と食をたる
人々と十十九の年在りて、門にて岳川ハ
障寺ヨリ利生堂人を押のけまちも多苦も多
きく室見足湯のわたくしもわい不減の見とまわを
湖を喰むて至く強忍する事と只海の底く潛り
居るの酒もからむものをし乍ら令長一却
遍く是と清くはすと自身のねむかと重慶も
又風もハ風と食うて更く水とふれかへ里返くを
あともよふくひじも枝へ引絶罷てかる患方解
人稀くそと薦の羽毛とと寝てすり人をかくえり
まく承の病を解りてかく風をかくふく市中この門がれ
道徳智識とつまゆく身も都人多く更りてひき

毛利不様國家と異を食すもの一便を貯めて
仕事へ就く猶と極へ一人と行うて天井も附ひ伍と寝
底と歌ひそよて放ちつゝせ候てえ出ふ枝ナヨの
陽とのうれしも

第三

水戸黄門光圓卿

見まこときく行の苦とまことにあまの
うに薄をもつてあらわせ

此御事ハ一通り能くもすり水多の流く浮一葉
たりくとけの苦となくするにいもなむとす
苦勞ハ勿論もそつひかくもほりやうせんく
罕しきものとまつたのとれどに付すとぞと辞す

毛利は沈じより三船も多め若勞をもつてこそ
至くの御事也あくまでも親勞として我身とぞひ
くの身と終焉すと我身をけまぐくもまー我
勤暑々まくとも累のしと身の我身はうて人
の痛を知まとつてまが事にあふーの便さかを
仁義とづらと歴史と見てへそり御事は御
人をえうかく水多のよみて御事の便は浮う
ぬりのまかんくとては後と差後を何事か爲事よ
してもまくもまくなり樂と苦勞は多角一を
唯一をう見と半みて人をもくしてまかの際
まくも苦な水多のまくかつひかくもくらひやう
まくも苦な水多のまくかつひかくもくらひやう

只冲威勢淺く何の考もしなじやうと思ひしるれども
數多き内家臣國民の安寧を心にしのみ思ひり
牛の肉若手か一万本の秋の肉と云ふ者も多
いと有るゝとされり黄門公ハ古令に秀一名高
モニ湯々せきひ沖つもの御主候ハ西山遺事ト云
書く見ゆきりモト寛文六年年育江戸冲浦の
下馬をく行へりされと達モリニ至七賢十惡合
併シミム人を逝くと姓名と形せり初の三賢人志
兼ア木戸黄門公と化一あり而一代の内数多の
書籍と傳りるゝ夥一元禄五年の正月嘗て此
邦スナリヒと號を寂レム

此をりまく死むる所よ

毛の抱きの前表より口をすくめの外人酒と呼
した事一と同年十月の中以テ四病を將軍御名公
仰せたつても御條々を多く口附して至承と承方
のトリ由省病を承る由モト三平四叟をと十二月六日
ゆき付冲喜セ捨ニキモト沖喜をナリ京終室
数多牌の内秋と號らる

野毛の毛と秋ハ子祥のと同く

ゆゑてかわり多シの事

えどももしくと云ふる事あと
つまや付角ハ一と云ふ事

白也モニテのあつれと稱よ

教多の事より本無事の事よりは絶えず
従事するが如きが其の所以である。

第六

雪中庵嵐若

移軒の心と如く強まれ

首を折るかと目するやうなつらの多く
それもかく、さうと云ふと云ふが、何の事か
一ひそみへておまかせがまのことを云ふので
是のことをひそめると云ふが、何の事か
此句はうそと云ふと云ふとあとは、是と云ふ
事の如きは人の一心に親を皆此身のそばに

あるまゝて情と云ふと、即ちやまと、おもむき
おもむきの信あまへ行ひ勤くつゝしの一人のま
情のうらぐれと、一人のやまと、情の勤くつゝま
風の勤くつゝと、信の信あまへ勤くつゝ情あまへす
うせとあると、信あまへの勤くつゝと、是と
信風相場の信同と云は風を、聲を、かゝりと
風の風を、また、風と、連れて、の勤くつゝと勤く
と見くと見くと見くと見くと見くと見くと見く
と見くと見くと見くと見くと見くと見くと見く

第七

底鷦道瓶

病氣のふれて居をあまて
そもあかりゆくあらわす

此事を寛延年月日人神所を家々御世界より
東嶽山の神廟に神を祭り納め退てて
涙を垂れ居る大恩徳有りて心の深ゆき事
是ひやまへて病氣のふれて居る人どを
見せてゆるといつたとぞ身を取て今日と在處の
人冊をすくに今い猶く別れゆく事は思
まくまく車も是限と名號の漫眼すく
もむかく而年一の後すくても其行のことを
また多様すゆくとも實体も潤り一すと
すとあまく走馬燈の如きも多業も

なまくぬ付のう宿殉死過歿と云ふ事もゆ停止
より餘るもく神のゆく御れ村のゆく涙
をあへて云徳の如きと云ふ事無ゆ一臣
とてその別れとをくにゆくが実和達と云ふ
は不能とアセ一人を元吉坊と云ふ事の學文
と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
御見と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

第八

寶井其角

物の事や乞食れ家

現の事

現

まゝ漸次の家事も芭蕉翁の高齢なり三國の
福島と兩乞の養育にて兩と降り、車竹が古
人を今一平漸次が後年へ妻へ化して至りて
死つ多井向ひもくらへるかへりと此人の死を心
悔ひ身をも身ひきりと心つと恨むたゞ西口
人を又かはれぬむらん身を失見立むたゞ人衣
服を被毛汚きたゞと看まつたゞと文字を書
あゝ織と金と色と乞食の圓ノ柄の茶を
自うつめ一絆とく用ひましる齊の晏子秋朝の
秀吉と成さる事無か福修と別の二ノ家の修
トトと名をあわせ小豆みづとを韓信と記と
聞多くぞいわゆるそー

法眼不角

烟くとも 痘を寢て見
坂手前

是を嘉義千葉とく家臣なり漸次もく法眼より
もくへば人半之子十人多く皆男子也而て不局
二男と壽角二男と辰角とて二男とて子登阪金
町小川並平八とて三人の方へ算に老せんに老の
あ親しつつに人こそ辰角を嫌してゆ一時父
不角は聲向きて辰角老せ一辰角は角とこそ
又貪念へ立向きてあ親しく多と至一末長く老
ト西郷も西行被り年老まじく牌勝を序す

旅館と同様に宿泊しておとせり。今年は
ソノハシの湯を仰ぐのではなく先年の旅石局のよ
りも良薦をうけて日向そーは西角温泉の宿ま
た角(アカギ)は雪の如く西角小屋にて温泉ハ
宿舎(ソノハシ)と申す。古びて宿主は旅館の
世話を湯主と申す。従て之屋へ成る。自身が主
温泉(アカギ)と湯主(アカギ)をもつて、主役とも云ふ。
戯すよりもおもむろと申す。時西角温泉は

往々いじめの如き移改の

りうひ出で、折と云得く

と連坐(アマタ)をあらひがと於(アマタ)と申す。宿と称ゆるが
新主(アマタ)と申す。而して宿主(アマタ)は既而

西角温泉は難波(アマタ)湯(アマタ)といひ、古より
ある東山(アマタ)と名(アマタ)い。昔(アマタ)は西角(アマタ)
トウラ(アマタ)の因(アマタ)といひ、仰(アマタ)ての事(アマタ)は古く
無(アマタ)めて西角(アマタ)はアマタ者(アマタ)と申す。ゆゑに西角
(アマタ)の西角(アマタ)も古く(アマタ)と申す。而して西角(アマタ)
は古く(アマタ)と申す。その歴史(アマタ)は發(アマタ)てて西角(アマタ)
ヤ一經再(アマタ)と申す。

かの名(アマタ)は既(アマタ)と云ふ。初(アマタ)

と書くやうな多(アマタ)は經再(アマタ)と歴史(アマタ)括(アマタ)て申す
と申す。やうに來(アマタ)を以(アマタ)て初(アマタ)と云ふ字を

才非凡と書くれど夙と喰ふべし利あらず身を
喰ふより宇が御と耕地の作とんかけよが而
小町の雨は乞くも事あるもかくえうト云
と理とせよと云ふらむれり孤を詩歌連歌く
ゆのうと妙と云ふこそきり唐生もたゞ
あき我れもと古へ源賴朝公是れ孤の精と
怪ミテと云ふ甲第日一首詠一ノ有不孤死
きり迹くも山陰民康或年少の亭に登り
署と見附一ノアリ孤孤をもてに帝一ノ臣
民康怪一と云々孤の跡をもの跡をも有
して嘗てソソクノシテ四例よほほ郡田
保る古の物羽つと思ひか一首能うる

アヒヤヒタタケハ民康と云ひて

夏ハ三月秋く當りの御衣

みのまく、身のこもる

三月の御衣は聖朝御衣亭のひへ身うだり
氏康を初めと名す一と云々と孤の文あと
功多き毛衣も下さざす孤を御代へすらうり不角
の名句もて三重うり身うねり死くもかくもかくも
孤を初めと云々と身うねり感もろぬを同一する也
愚痴ふ角ハ向く妙と傳うり一年丹後玉功代の
文殊もも名句とせ又紫句とて瘧と彦良もも
かくもうりとてもあくも傳へしと云ふ

第十

吉川惟光

思へるは人の思ひよと
わらひふれどもひくに
此うき御を差す是故思ひくに陽ふくに仁と
又うきうき也陶淵明う我子たて僕と並く
遣てうきうき汝う薪水の勞と助へゆく一僕を
あてやふ御とくそもく子なり汝う薪木と薪
と刻きと汝とくに汝う勞りと不復をひくに
つうへは小儀子と報まく我汝を思ふ風小
不復くうへまかうそ正往うそれは淵明
子仁愛の語をうかう音へは恵足りぬひより
後へはる延享二年の暮御用ノ月佐後圓(彌)の

おぬあれ森よ浦うへにうへ立候の少牌とほが
チ柳うへふと見くと是と押前うへにいひまゆ
一ふあり洞明うると思ひゆ一の自ふもつふ有
是もくのよぐう口ひすむれ思ひくにくに情を
加へりては一首と書て託ちむれれりまを
草紙としむれ思ひくにくに思ひくにくに
れ體とせむくにくにくに

第十一

基角門へ

貞佑

思不傳く 煙をひく

基角門

此身作え基角祕翁の身なり今のみ佑と平砂

ノ勝西年りは尙處全之御書の夷遂の匂ひ思ひ
多く嘉穀の玉麦脊か原より出るが、まよ本の系と
思ふと樊尾則更壳とまとと養へ、同根同性と
いふに禁り立て有御もあつて、何世年と
親と不和成も有又兄弟五行心もひく家督を
争ひて海くぬれども是も他と嘗てて甚也往々
車門まで十石八千石へと二三へと是を分俸して
不羣の科因物少て因あとそむかふ俗く以血て
血を洗ふてく清るなるよき事也か候ゆ
えどもそぞろに孕まれキム人間血脉の異變す
み傳の多也ゆもくく和漢より多く至り
近くそぞろ利隆を參す利隆田舎者のかずの在居の智志遠と

様之經の口傳母の御子と利隆と毒害仰るを
志継知りて利隆工ふてもあつて而く食一啖
足と云て又利隆も足と利隆のまづれと云
たゞへ毒あるとて身の食せざるやうじと云く
経の文を身にうつし血を吐く過去の口傳
の道とさうもくの事かのうの後と云ひて
ひとせちく中庸よりたゞけ癸卯の口傳と守
らむと因れと於くの者と云ひ戒の句也は貞健
或付其事角等りて口傳後わが孫吉慶等皆一
貞健拿と傳ふてと云て其角をかゝるハ降
そゆくあくまで金華の宿なりて相承也一也

我あく思へるが、今拿れど
とえげもんじて自作で貰あつて

傍らのと四つとも一かまくらを
と口とてみたり、今度と拿拿の、
名う。

京六條

勇士 本國寺日達上人

我庵を都に以て、玄妻を

行ふやうやう千尋の竹

此極奇き日まで、頑學れぬつゝく法華の行者
をめに比喩ふの大宅とあられんつて此をいかづる若
令娘珠玉を懷きした湯の宿所とてはなし皆各聞

の様なり、人をうなづくを嘆へる事もあらず、ふ
るをもむかし家持寺の戒文を讀き如の教
主とあつとせば、紫門などのもの、一也、亦かに思ふ
舍りて、と承て、其多能うるを教するをいへりけ
日達上人を圓滿に至候もといへたの底とそちもむかし、此
都もむかしを、おまつりけりやうやく湯も廻りく
漫もとと大宮人も、廻りて、さりとて、日達上人を
を年一日暮室の外の学問して、紫門の活躍を
かり、詠迷縦とぞ、又家孫縦とも言と假り、
紫門の紫門とつて、日までの、学者と感

もあ

弟吉

活いかれくのくはなよ

沾徳

是を下りてえ日の候也一年三百六日人の心はまかず
雲一朝を以ひるみを少しま或ハ復立又ハ多ひ而見
ゆるにあらざりてすもあつてとてあくよしとて
春の日は徳くそへ徳をあめ日はとくとくとて
中も所とえ日とりつゝとへ老ふるも若ふる年を
うつむかまわんとせ門松立向くとまくとて病あく
のあれ板双子をほんとひくとて病くとて
ともと年始の事じゆる唐模倣彌麻子と
父母妻子の事じゆとほんとひ日が一徳立て空
ありまだ我へて年の各月の辰日は徳立て空く

うと焉やきりもくともあれもん徳立年年中の人々
うとけえ日は徳立て空くとて日が一徳立て
とりふ角丸季子下一年の徳立とても空く
かとくとて自立と初立とてうとひ事ハ新也
あうとくとてうとひ事ハ新也

弟吉

京祇園の曉

あくとあくとあくとあくとあくとあくと

あくとあくとあくとあくとあくとあくと

祇園の水系盆の術をかたうといへてもらうと
さくへ新徳立とてま一徳立とてうとひ事ハ新也
うとくとてうとひ事ハ新也

一年穀の頬

雪ふるい本梢にて擧る

新苗の生むる處の音の如くして

是と名ふるも一すれ餘すより少くかげてすの小町のす
もゆきよみをせども實を絆すと女より西嶺先生の
書ふも見ゆるに於懸すと書ふと小町の事出でるが
圓満とも郡田良實、娘あらわきとぞすと
ゆと深ゆるに至るも高位す更すよりあらむ
初すれ他有れり。後つるなり女のすくねぬと
貫之す書よしとけんりやくひなまことすハ仙洞御
衣御の付仰候の事すと下りてかく重んじて
今上りより御追瀧を申んやうのすれり

思ひておも人をもやめ多き小瓶の四つ三
種の叶ひ一と十角のは貢京のものやせ
あり小野小町の花園の瓶よまき望むと云ふと
もやけ女の一代の手と集く瓶の多きと書あり

弟丈

足立東川

は自由唐人りつみ著そ

此人を辛夷の五忍のと記語の字通也日本ハ美す
もやうりかく早く序の間と云ふと我羽と奉一向也
翁の織物小走きとて一見ると日本人のやうあれよしと
絶天夢の類ひ絶えず一織がまとめてあると
而一束人の手段の甚多と考へてうかとつけ

體と対室とをすりて所後の者と脱落するる
くはやまの事第一節とく序明く日午とえ
よむをなす

第十六

赤井圖書直綏

世れ中ひ限をもよなれども

君の齡のそむれ益をも

世の事と事保たる成年左宗公の所守らまくと定名の
まへ牛野の松多の櫻と極とせり今櫻園といり
は君の盛年の節極とと後方へとて牛野へ浦成を
なるとゆく元家とて櫻をちりあくにりこまわ
リ將軍れよとて萬葉傳の牛櫻の跡を詩を連

詠ひあても差上すとちにゆ出ゆき多是とも汝を人
仰もよと人とよ一とぬゆ徒政赤井墨書けを詠
差すのとよと御渡して左宗公高き歎のセ
ク人世の半と云ふ文字に牛野とその人の限をも
頗の事多を於事ととの白小つゆ多く限あるこれ
と我頗を行幸君の御齡の百年もたらりえ
うと君とけり忠情の少持く君の御食か哉
美代のとよとよとせよとせよとせよとせよ
追従輕音と有と而小而くよと御とを極と云
とぞ御とよとせよとせよとせよとせよとせよ
せよとせよとせよとせよとせよとせよとせよ

とくと千年と萬年と生れゐるゝあつてもなく
丈金百年ともと君は從つて山書院とて是を
行ふ志言の詠す所の筆をもむかしに於て一巻と號す
事は墨書きの底行健ち地ひかへ捨てしや
まよひも後年仙洞様御所へと移るゝお宿を
主顧せしものと考めりと雪とくとれ耳と呼す
やと詠多々く傳くる

第十七

中村左佐助陽之者

故一

あつゝ仰れおは初と申ゆるの爲初音モリ
是を深町中村夜は功陽千助と云う者の名ゆる是を
玄教くらへる世の牛ハ馬牛の至る處もりくとあり

え身は重不乍りと申とあまへきり滿く人衆
余の雷光石火也今と知らず莫離く立る處のと
人の死と葬れの儀を思ふと死する人の嘆み
して死の戲とけりと不思議と我も想すも死を
は送るゆゑと夫をよりもかづき屠而の羊の安ら
我心のがよとて忘れぬ故此の取山の廻りまく
そよがんそりと限りとども一ノ圓月
絶命の夕下ともやあらんと事のへむれ已う
助け處の却てねの處捨てさせと済ふとを
云ひた

第六

盲人不怨齋

久遠の世をもとめよ

思ひ墨すらうつて勝取の月

論語曰夫と恨む人をも皆すとへ要語は天
食いとへ不辛小多づくの身のとれりや
きの仰半身病教淵が不辛經年下佛道をたどる
の富業よとつて陽を恨むを也と思業れ
といふ不辛にまほんを云々今乍ら人をも
えと恨むと哲ひ事かくやは不怨を無事
雲毎日はの夜半は傳者少く深閑多めたり
中年のはじうつるをもとへばくわく此眼療ま
くもとをも一がと縛るあ眼をもく首たらそん

至る處せきと學問へ急ひの日の育みみゆ行を
用章とせり是て今へもとも恨むと人をも皆を
そりまかとぞと恨むすの文ととてあゝ不怨を無事
のう名ととく兩眼育めりとて心の眼の門丸
吊ててせくとくとくとくとくとくとくとくとく
彈丸をもくとくとくとくとくとくとくとくとく
延喜帝の宮へて御内侍京街道を守る者
河原とおとおとを浮く名付たりとて塔を育人
非画とし育人としてさくとくとくとくとくとく
をとみのあれ前書とく従事の人とそとそとけり行を
育人こそ見る事はく妙としそふらむとくとく
をとて見るとくとくとくとくとくとくとくとくとく

序にまへて 蟬もハ育人子遠ひやうは年
人をえどとぞくと蟬もと親してらく見を是と
心服くまほる多の親の寄りて五年の心に親と
是も一親世音も華院彦もとおもて婆婆世
おも音と親してせんじよもとおもせの音と親
と書て親世音とすむる音とるそつぶの節へは
あ眼とよみた静くらととゆ笑時へ目より
まくらくらりぬくと足く眼のあきふ肉眼三眼
悪眼活眼又ハ心眼佛眼のハ活華音義くそく
まくらもまくく多すく不音國ケ京軍に大刑放
か浦眼育かくく足音とみて軍機の多すかと
却り勝敗とそりしれ毛く眼のをも而すりゆく

卷之二 國府同三者を育目めて馬くぬと海う
トドリテマ馬湯の初て一つハ馬の口と而せて鐵ミ
至れ木ニ麻木リハモリトマ湯のあれと一方
キとがも深淺とて行けりも石をもすれらるる者
内へ居テマシテ跡とある馬は足音と笑をも馬を
痴癖老馬居るとらくゆくわと達つても馬は
痴癖老馬居るとらくゆくわと達つても馬は
都の音生をと目ゆり育目のし涼一毛管公眼の聲
而あくと蟬也と育目ゆり育目の足音と笑く東洋
人ともあまうとて陣と通ふ人ともおとめとゆすり知り
却くもゆづらはせまくを死一死てそされまで
別とくまくとくまくも人情廻流船の事也とれ

不思議な目で見ゆる目的と云ふて人間はもろもろ
うらやましきの心をも見ゆると見て眼めり威も
威勢もあつて盲目のひからり傍へぬきめぐらす
はあつてそれもまたうらやましきが一見もくらむ
よしと勝負のやうもあらう。うの筋筋争ひをそ
ば古くとぞいわ

第十九

安藤対馬守信友

老れ日や ほまゆのす 様 様
毛を先年拂老年後山高寺院へ 安藤対馬守信友の有
なり前と詔せし お前惟是のすと同一人の匂は
淵ゆき多事とぞまづくつゝ 重き夥多達をも

胡寒風極のひくに附と通じて素足めて尻ひけ
うそへ坐して眉角にこゑをせんかとゆるくらうと
駕のりうつ四流して向まゆるからへ新の洋子
居るくへ巨體へ行くらく居らせん小まご人の出
しもくの夜のりうちかと所を雪平とすもいとうもね
あるく不役さとくに懐みれぬ也又は戸隠草薙翁
ト西鳥立の支拂ひくに拂詔をねりと西多
あふ夜吾の身障りと嘆息りて者の方を拂詔を
小洞市と傳へ連て先のこせと女房押あて駕
あそり我子とく傳へて先のほとくの君とくらう
是を冠里の向れ事も支拂と雪多の小洞市と傳
達するべく一人出で一威脅からぬる也乎冠里あ

大名の申し合ひ各高き源へあゆて此役を承
と向をみえり若宗公若宗公若宗公若宗公若宗公
生野池へ浸して食うるを沙野也野も野も野も
家も沙野也野も野も野も野も野も野も野も野も
を左にすらせ甚至いのれまことにあくふ穀を
も魚の野草の類生にく含うつて沙野の野草
生をなす事まへん何物とも蕭条と拂はすがま
魚一生物をあわせ毒氣残る豆腐の生れを生
野物を付てキヘヒトリノシヌ豆腐と名づけ
年供とあくやん坐て山角に於て御立と
ナドニモクルを左宗公行はるを方アホを心せむ
食をぬき豆腐にて思ひ出せりま方ハ泥縄の

豆腐とよむとせり今れ豆腐と野めく豆腐
小一向せひとりき一時野るるおらへと雪の日れ
野葉あいのー龍田山とやまね多まひ左宗公中嶽庄を
豆腐と野して白き紅葉もれ而るーとー雪の原
あを野葉もちりとくさみとくさみとくさみと
あを野葉もちりとくさみとくさみとくさみと
あを野葉もちりとくさみとくさみとくさみと
経ひくも若一からくとくや左宗公のまにーとー
あを野葉もちりとくさみとくさみとくさみと
あを野葉もちりとくさみとくさみとくさみと
あを野葉もちりとくさみとくさみとくさみと
あを野葉もちりとくさみとくさみとくさみと
仲約々食あてばりー、夥多反吐しきれ左宗公
對するもとあらそせんと思ひ反吐と云ひ野そ一句を
やくそー附野馬を取あへて狼の反吐腺を多く牛

九餐と方けまへを家々感一うひかく三万八
抄あつて此處をのじるを多めにつても釐の句を
あくと角まんに入り

第二

墨池草尾海

角を走り浮舟浮舟は至麻うれ
鳥類を空服めづく表ハ目アスヘモカニ生渴也
ちゆに空舟ハ豆ハオモミヘモクモ不れもあくに浮道
候キ世五年の多きも却く漁日暮く服め小
先もさげとも夜のすめまくせすを皆あくより行の
まもももく食馬とふもをも漁麻ももと
食食のまく表のまく又育目のやく元行

あくす人をだく本れ下著に浮まく一生と送る
毛人異うもかの有候多くありま一寛、唐十二
年は夏秋用のく一本を既くそり工子松と云宮を
至里すに小曲音く而て油一に牧を一そも今
江戸のいへ牧やと物の行とせ活すとしとさくと
宿の事ととそくと辛拂りぬりと牧やとえあそ
のふくとそくとおはまくとあらわしとあらわしと
用のうけまく行もととく又相立歩五前くとすらま
候をたへて附てね余せ一湯ま湯苦と云御一燒て
汁入とらかくまき行ふくとやと弱り度
是を海舌をと云く未合志れととくとくとく地

あく糊もへり縫はまなとほにつひよどり而
そ糊うるを一是を汚うるを出く畢竟りも、污水の
垢うるを成らるのとてはれと布敷と旅と居するを
宿と立りぬ源と海苔一つ草木とをけまくはるが
候ひがくつらはりとあるを通ふとくつみて吹極す
弓思ふと此あらへき多難と人と智れとけ賢いの
をも因みの境遇をと少安樂と生れく人と名と
争ふる斗と思へても生れても一生も
回り人間よ生と渴ても生れぬとえ井戸の裡
困るゆゑと云候ひと朽果るどとちづれたるを
も者多く名経知識を活き鄙の生と天災遇と
歎のゆもき是くと云ふにかづくと身ハ猶心を

のち故もと云綱一田主野人よ至る者にうはま
む者にて不まうるを水を方處の筈くほりそ
身の生活をしのの耳くと次第前後り荒え
てたる事と嘗ひ満く役角ドクハマ海と嘗ひて布
秋葉山うり三河國東山寺へ山越シナカトハシヘ九馬石
道と赤石山ととて至爾のゆく成らる一升含むる
者もまたが圓のゆく信祀の人材中には有能秀才
の者うふてまんじ生きてるを候して朽果るをぞ殆
ふと源うて生きて一様様へくすと知れ候を因
不至てももと身の天奈也同一行少くも差充
生取て肩すれ骨とおせり高傳の手にまわる

波草庵の鼻筋第一田樂車と廻てひづれ西移
相も主めく佛前と刻まし又琴もあても貴人むきを
西へ下駄とぬてり極の下れ候の世の牛舌同
あつておる耳と別うふうにとくとくえども是を
終らせる事を少経よせども、やうまいりゆ一地くそ
是を差すせよ是を差す後は鼻筋第一にせどもて
依怙鼻貞一と生一とせうへりはす左手に御劍
わもく松の木の腰ぬとも立す草木にゆつまく
うへり宣子を祀る神社の白く門もまた人牛尼色
山毛の木をあこへやく山羊の様に市中と見ゆ
人毛もあく親えと我えとそれととて山とて
すき親す許を出うと煙の年年が年々とあく年

事りハキ放しこ思ひそし一日と我傳小室と
うり年齢三と半が子供のうり向まつてやうに坐す
ひやうの脚人とておまえをあそびとくとくと
あゆみにとくとくとておまくとくとくとくとくとく
極を西と女とくとくとくとくとくとくとくとくとく
夫へ行一布がく中とくとくとくとくとくとくとく
自念ととくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
足と一蹴とくとくとくとくとくとくとくとくとく
比喩とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
而被のがまをあくとくとくとくとくとくとくとく
外をもとくねうとくとくとくとくとくとくとくとく
馬をとあまうとくとくとくとくとくとくとくとく

とて物く生れし黒駿馬ノ命を生きて因果有
智者居者得失を迷フ一牛と至麻一て善守
鳥にあり鳥子をもれぬ事有矣

第二

黒田篠庵の述る

手を取のんばつゝとおひだり

おのこまじいゆゑかな

此事はかえり自らが至和無はされかどもかとみ
ゆくをふ焉也前章行天をひねく右後章あけと
通うる所あ半ツルアリとそへづくに難能も
多海外ニテ生れ身を守護一ソづくことより
前後くちの極出く行ふと思フ一多毛御殿を

スケをほくトミミ松をまよす也大のあひだく
キモとやあと名づかせば後くみと大後く
一風立ちよぐくそり清小肥前経作と書かへり
今朝の心を御みと立がきらんと仕事の公
事初めとソヘミ奈川天香海で迷ひのり付
御ぬ大の口等セサカく於くしての正身の立處の
事とあら車内一成長も多經能をもとと教られ
さむ洪もくもを悉く身を拂ひて清々安黄門久
村也多き小手程く被と思つてゆく内一我子と毫
毛くやく被をいつく一三日行ひ河口の五段野
宿の恩と効かと立草前もうせをひくつとまん
西一かくまを多き事一五とおな音と教の恩の効

向ふよりと接せし親の恩を教ふ答せ世の中には
多くおぬ者あらざりゆきとむ親く孝と名をも
すが故に親ふるく親ふる者なし子を
親めかと教へぬかと云ひけり一すの内離て子を
十九年もゐるを嘗て身の迷ひ一室を
いつくも年へ詠一絶たて親の慈然公の御め大
恩がさむれもあく親の恩は御き親のくの体め
うの身の詠りの歌なり

神田

樓川

各自や席の立候き意の言

是を江戸柳原にて西田又五郎の手に受けて存

第二十三

あれども家通なり此の句とて感懷多一
名句とせよと月の内一ヶ月と貴故二子
里の外ことを濃くとてもや一章を曰て
とも小文くわ樂ひよ席は良妻美人の事半
ふまた月の内一ヶ月と目をとひあすかのく
辛の言てくわくとたかくすうまく
是世間の人のふくとおりあつまくくす
處かば若男もとく酒者と耳へ一若の主
ひの處をい耳からぬ酒を肴と熱湯と香
りて我酒すれぐみとすし日のみま
うれぐりうれぐみとくとくとくとくとくとく

久の所あり

東觀山

寒松院

皆人を神の形とひきあひ

うつあら神のうみてせの手

此説あるまへ東觀山御宮別處室に院宇す候御様
御宮へまづて宮殿を御正飯く東觀室よります
うやく敵をすり神君子辛夷君の功被せ故の少卿
と碑せらの下安詳の功と立後かく門吏人の門る
あとほれ源葉光と号すと云ふと只一天守法
美民の陰謀の者と取らんとの御仁愛の恩を
是神佛の靈應とへて詔書せられ候

碑一骨の名はもと思へば神と云ひてのふを
傳へと因一もとて詔ある家康公御骨と碑の
いとしきふ而よりあ附の人ノムキシカハ情大アモ
世代のうち漫々とまづ今の人と恨もあらずすより
御宮別處の不付手紙叶ひ有りて見て底に記載す
まづく感源一皆世間の人神の折と申候と云ひ
しの東照宮の御心は御都からなり候る一若國
主御もと小豆もてて安食候の間を主と御り御か
げぞとせむかへとせり主と申候と云ひ感源の二
毛とふくとそとて主と申候の御恩とお印
サクノウと申候門主のことをお教戒と申候一

此寒松院もくゑんにて大名の諸事に多く
生え立つて也下級の者つと貪る事つむかへと立入
あひ是も茎と丈とふれりて而る

浅葉

乾升

美馬の竹市やゆづへまき一ノ原村も

某市に寺より十日十三日ありて和林の寺のやまとひ
勝多アキアミタタヒツノ暖炉アシテ移靈棚トシテ
トシテ御も前寺へまき周の寺せしもさすが
方モナリノ食も石井とまつ近訓院ノ今
於病故死して一辰のうちにもとくのねく入らせり
雪ひタヤニモソレくとく而り和復トシテまつ

人をもとめやまと乍らとひとひふとと聞く

徳川高(智)宗武

弟二又
槐三ノ子也たるもとゆくとゆく

三十年とととととて居る

是を因要歎の仰ゆすりス而て吉宗父の至世の音画
ととて於て家を立て追ひて是れ槐様のゆくわ
母の御坐印切小しお父君の御龕をみていとく内家の
様とぞりてたる家父仰他異らと三十年目く五年
有附右ゆゆくと四重山一之経を西洋之ゆれ左も
うづくと槐様のゆゆくともの後を経て西洋之
廟を奉らざりふくて却く吉宗父の御おゆ

わの事の事たる事もあらへて口ひの裏の間と移
させほひくわの事も實も一概様もそぞをえすて先
達をみるも下さ門三田をもせく便りに滿す
四考送をもへつけりすとつゝ意すりまこと
ち人あまもろもんとくら達すをり又あくら
ちも下くもあてしけゆすれあふくとおざ

第二六

獨安庵

起波

時既や老かばよとえお波
は匂いを重じとても又えの雨のまゝるゝ時既の
生度もまた能く情をきくありと是へゆる一物の
あがてるをもスハキタ人筋を呉波りやう海へり

寒の高ひりをひとと伏西の御又多くと西移
らむるう一の月もうと思ひも左のと多叶ふ
波を發すも今もあや一あ年もたら我らの波を
をけまひ立へりと又伏西の御りまく人をひきと
主人を立ちへゑと氣と立ちとしりくへりとす
御者よ御り一の波をもあくらまく一年の波
きりともき御るをとくととくととくととくと
あつらぬ行けまくとくとくとくとくとくとくと
日月と聲にせんと多くとくとくとくとくと
小雨一の秋の首吐ものめぐらひと病く、玄斗日
出とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
墨うをな中と思ひもとせよおまくとせよ

身と初生なる今後之が爲て附く微徴して之を
本門法と名づくべからずかく有る事もやうり
因ふて皆より別傳を由來する初めのうつ商の
得失をかへまことにあせらるゝ経の事一而も
人をも皆りとんと初生者と見て出世したる
一毛車をもえの役をも神り因ふて取れを
居るゝ一石の手すり等年所までにあらは
生来も嘗てよき耳味もも危角らを蒙る事
多く穿弊をひき内へ古事記を宣す憂
うつと憂ふと煙ふと煙ふと同いりま
父考と少尉を乞は新波病死の一月前より
被差買の傍小舟く辯せく沙汰と云ひけり
沙汰買の傍小舟く辯せく沙汰と云ひけり

辯せく沙汰と云ひけり沙汰と云ひの句に重て増む
辯せく沙汰と形勢を呈へて云候て是よ
うともももハ「若狭の舟うち」ほど冰の船と決
まく舟うち水と没込みてゆくゆく又海へ投金で
水の水と乍らとて生見事と又死の事と爲りと
りつくりと爲辯せく沙汰と云ひ

第二七

松平陸奥守宗村

世はよし派文字書の五章

とあるのうふれそひふを

せよせよのとあるかやへ奥丹伝文派文字書の
石と宣ふと首をすくへ峯寒と云ふと石のゆく

のよきよき形あわせと経とてくまほしてそ
そくみの形経へうきて見ゆれまことうすまの今
こまゆり百人一首の中にも詠のてれそくと
ほんじは古事記よりのねらも奥舟の名前もほる
家村を我太守にまつてはく類をこねゆきあらう
木載らまくまの竹山とひづのむすめ我頃かのゆ
足もよの、おもねねをかふれうかわのうそ
えまくをくわせねあはすと春日移里へそが
してくみ日の里と頃へてくみのあそくま
まを已とくふくのるくすくかひふれくまをく
は隣家の家村をそ家公くわけ一字頃歌くく
利根振多門をよく嫁娶をハ先そく

第二十六

加賀

玉藻

まどか男山我却せうり難子

是を門春れ野くらむか彼の妻乞くかのうゑと
くく却くらむのすとくまくのえをれ強いはる
蛇く春くらむとやしくもくをねねと年をれ年を難歌と
不教はき禍の門とく歌とり角り古の太佛の玉眼を
盜きくかくまくまくみのはうり歌と五年紀に十
余年の軍をくら年席を経て難きうけ

第二十九

徳川形部久宗尹卿

考つるまほ形くらむのゆ

音をもとめ 里流をまかみ

人所をふれぬ三事の初づれの身を拂ふ氣も
生ひずせしりへ四度此とあわせむれども今
移すを知らずとぞ家主とおゆのうちの野の言
をなくともいへばとあるとせむ人主をもつて
ゐるやうにありて里の山林を左へを山道通す
時くちに古事記は手元を失ふと山林といへどもす
とく後女の蓑一つもあらまほと清とゆるく
ゆ佛心のていぬる

第二十

嘗てゆきにあく 鶯も鶯

自在庵退徳

皆ハ今其根柢くわはあひの源流を滅空りやあ
今其根柢を復興とす者も嘗て鶯と名を名す
不満とも流石と名頃のばくとて其程と矣へ
もとて冠蓋もかゝらずて鶯と名前一萬セーと
語をさへ向ひ丈を今日の人の情とくらべり其
形と色と名と所とけんと色と名の不變り幽
と陰と視とさへ行ひとらやましられ奉ひぬへ
鳥參ハ孔のえ入り大ソヘリは聲を之に付ば奉
ひと称をあふのと存續してありとゆ宅せよ
と母とと歌をうたひ仰ひとゆと仰ひと仰
被徳と仰ひと被徳方より近づひと遣りて

手紙の中へはりと書き入り小鳩をうけ廻の女郎ハ
多摩屋の面接とも如くも小修やう御名と学む事
多へとくに学ぶ事あるもあらへ附りたて来て、
うれしき機縫事のてくわき印と面接するがまく
ひきの奉ひなむしよりの返事安へとくも
まと付りておもてけむとけむとくとくとくとくと
氣附かれて帰宅一そくほそく居く弟と母
正一多ふ思ふえむ急件とし威公サシシムも和
わせの後をう

令二十一

尾張家春卿

おまのまのまくまくまくまく

御要乞はせ貞宗善とや身ねをとおる家と時代との間
を度すひや陽長経年とて年リと將すひく
罷障と懺悔とすし御三家の廢止と多くの
人とのつまらぬ事の今ハ物語とぞとゆき改
めたり更うの事と口免を一人おもひらうとされ
うの思古とて吹拂寝起とせむる一升半人うれ
半也と目立あわせとぞとく人の知らせと
うれしき嘆の聲の響くもとへのうどとの声
懐の御あいと姦淵一

江戸後葉山子

今江戸日暮橋前送り、往船にて、すこやく家西也
は、舟送りにて、人をとむるをよし、葉山子
鳥居にて、田畠の木に、絶日立て、初日も
然葉と破瓶と作三三軒に門、まことに人の姿よし
行へ渡りたる所のあらう、あす即ち稻荷御
儀より、とまどひ、とまどひ、とまどひ、とまど
勝より、葉山子、行ふを、れむるをうそひ
すかさぬ、傷き初見を、あらう、あらう、あらう、あらう、
とまど者と、只見せし、牛じり、わく少佐と、行半
年の役と、たとえありて、傷きまほんやうと思ふ男共
思ひの、が、事業の送り、かく、身代の、きみと、かく

今年も三百あれ延きは、その男共傷き、身代を
河の男共商功者と、拳をねぐの日、すこやくは、
傷り、三へどとも十處、體の、手筋、う手の、足へ、葉
子れ、多病と同うる也、又方共れ、重音と、ひげ、口、
傳の、後、合、班、度の、彦れ川、番、傳、金山の、金丸と、常、傳
キ、も、内、も、行、三、う、手、う、も、身代の、放、を、ん、こ、一寸
ねるも、泣け、せ、も、傷、く、罵、て、ま、い、あ、こ、牛、じ、そ
き、ね、も、こ、百、の、損、毛、金、丸、と、嘗、の、あ、ま、と、ほ
ま、ふ、而、ま、と、船、と、あ、く、首、ハ、行、あ、と、ま
ま、し、も、今、い、り、一、ま、く、一、般、の、三、本、旅、と、お、食、と
つ、ま、と、そ、ゆ、い、放、て、只、減、じ、と、癪、を、ハ、船、改
期、か、と、ま、う、是、あ、を、傷、て、す、葉、山、子、に、ハ、省、ま、う

第三

大岡然希忠相

松の枝のまくらひまくらば

やねみのまくらふへてせみ中

是をも忘れずして仕事はもひ奉りまほ候
也。まうう南奉りこなりとお索きの見
かくびに町奉り役と相勧自らのらすを
我と家身と成らき身也。首平多佐治はるに信三母
まのの音ねどとつてのねをまくらまくら
ゆく正ぐれまくらまくらあことまくらと
まくら都とまくら常盤のねの音くらめく
勤くらまくらねのね曲まくらつまくらめくら
ね彼と成らまくら岩まくらまくら教成くらべ

トは向柳の枝うまくまくらまくらまくら
と柳のまくらとまくらまくらまくらまくら
まくらまくらまくらまくらまくらまくら

第四

成

うねくらニマ様ハアム

は向き沿列門人成金家道の向くらうね様を
度半れ見様丈様え様うちもひ丈様もひ耳成
あむけを時もの音もうつとうへ耳をうとう
うへえする他よりこれ白ともうつニマ様を
財鳥をせんもえのうもあとつとつと見もあ
苦も何とつとつとつと又つとふとつと世の半

船あらまつて出ふ舟の波風さの身すゑ
遙雨さり秋月輝楊婆者帽其思ひやうし日
さへきよみ風雅人を以へと盜滅少しきはね
おゆを日向をゆき秋海彦日影をゆけ杜算ハ作
のそ、而今そじうひそめを下り草のわふる是
遠事とぞくらちくへきわづらはもとすくす
生はすくすく郭ニキヌキ笑ふも笑様の酒
世のよとつまむらをひめやうめくせうめく
うゆうり

第三文

名月や 我國兩多く西代

大波

十九

此方丸ハ今比國十郎う焉て、祖父海老翁、
昨より支度海老翁始方、こゝへ渡す二郎と改名
一又柏道とかへすと今比國十郎の号張之郎
いづきかたう句を至と日向ゆく我教移ます
名月にそ表されそり至るるもあつく國あり
弓の弓小移がと月を嘗め、したゞ向島
日月の承認を受り、より形く新の原と
えをくへそり、やうと日新と國あらまく日原
金娘を棄ひ娘を御めると思ふくまほく
天の之後、うゆもとそらく清きをゆくく
名月を名所、首迎ひて平を附といふ

貧しき百姓を世間の若々小細工へせうる
月の朝とあら来宿とひふぢうちわふと
つまみ細工と根りしむのとひふるゑと
うつと詠くのこせんにこどもとすとあれ
見くびきゆきとては平野と不警のゆうと
まかせんといふ又えのをうと理り候とつまみ
畜へゆり至ち門づくゆうと是自故にえ初
者と口と傳くやとせきふをふへと今こそ
をそへ毛業と悔と首とメと相あぬ書往済耗
篇とくふ共身ふと本の新と一曲をと
歌と曲ふと一陽震と初是うと云物地知
我初人知ふとて

東方唐島浪人
大野玄蕃

卷之六
弟二六
海金鷲のちよれをめも
みよしにこよみよのそりう

此人を大和國郡山城主家原人とすと家断続
の後浪とお身とめり渴命とくみの道路よ
心人とれりとよそ清すれとあまびとひと
ひとひとひとひとひとひとひとひとひと
ひとひとひとひとひとひとひとひとひと
ひとひとひとひとひとひとひとひとひと
ひとひとひとひとひとひとひとひとひと

橋上路邊乞一錢可憐乞食幾千々
人間富貴水中泡昨日錦今日又薦
多財多福是爲人所重之物而含之不食
空也人情也此の賢者の風俗浮生屈原の
句もせうく活潰と云へ不至りと富貴
浮雲也と云ふ聖哲也と不義すと云
善也何とせうる延年をも終ひ
かくも多也

第十七

乞人多也
乞人多也

乞人多也

是を予元年立初へてより人情頗爾門前と
移々起附して乞人の後一も亦り年既に十
歳半にして心人似合を以て之よりて
いつまゆき者のもとと之へ聲一もしく予
之以詫詫むけ門前徧の子を房とも者よりて皆猿
市居ありて之を以て今より一術一術の五六十
うつ寧にこれちくわく門をとへあり掃除を
あそり一いそむく傷寒と病く相思ぬ哉
アスガの中にはすと縛とちき五古の

書有あそり

漸太非人鬼

今即帰上天

破蓑与破笠

夢覺寺門前

ソウソウの成りのひたりて、泥牛九蓮竹中の
黄金とを乞ひしをばあまくらむれども、
今お思ひ出せりはれんお累一七日目小行くう膳を
れを立ち言の詩を書きそぞり

黄塵世路不永名独歩往還方外情
借問此人何以是疑知蝴蝶夢中生

弟三十六

浅草

八助

ソウソウのやうくうふんの御事
我身をかうく墨書きせ事
毛ハ浅草車善セリナトの心人なり主其何者、
御事モ却モセ日華鶴の下り草くは助経の

小販布と捨テ、小中に金ニ捨あらう世の常也此
人よりはあまた怪ひ事速ミ金とねぐ途ミ多大
此ノ助至小怪ノ事彦セリ人之多ナ難候ミ多大
シテ尋て來ゆるハ無シ——我は西と東とを並
サリと楊柳子とをさへ、至前よりの相の種を
此と約モ多々金を落セ——人を年々モハ助七度
を脇へとすとあけりるが如く仲間の心三人
ありハ助タレトヤクスモ何モよい喰あらざる
やうに——下町の店で絹子薄の腰包つきの如
うとちみそハ無差て而まで今飲食とく候く
月の二十三日よりまことに用ひては不ハ勤な
き事と併石也人氣と付モそんたゞ江戸

事のうち捨て行はうたり掌て金を落せし誠
往多の時代をも傍とす者りつゝ捨て金がある
ゆと思ふと尋ねるとひ跡のう事より金子にも
落せし人あるひやと云ふ程金子の高いこ捨てて
ゆくの外、賊布にひ中に金形金子の古き帛不
色あるそりとえを金子の金子は是をもみへ
中改く金子をもばへと差出せし者居るま
等がたあ、此人にて左今持つて金子が至り
一わざも志を失へて金紙一叶金子へ落すま
と易いと云はれてよくのちり逃げたがな
此れの金子も皆金子であるとアラモトと
えまた折り口と高木をももして世と海へゆ

支那人がく思ひて今あると逃げてアラモト
もその金子をもて捨て金子の世人うひそり、あやと大
笑へてゐるとの様のあらま金子と書ふ程金子の金子
へ金子の金子一叶アラモトも云ひあら人の高木と
難儀せし所、金子と書ひ得の後も立あて五萬葉ハ
立あて五萬葉あらんへと積あて難儀なり、里人持つ
あせりと云ひ名を附てて宵捨あて逃げてアラモトと
ゆれても中々四壁人深處へひきこむと
逃げてアラモト口と高木を落す又老女の身金子と立ちて
支那の難儀なり、極もひどき難儀をもゆく氣もさ
すくらまへるひと角とひと色の肢とがて金子
約あつたり三井の返一ヤセシ物も、公こうの庵と

十日か八日用をけまく我もまた少金へゆき販の
一箱を喰ひやうとおまかせりと手替りにてそち
あゆくわづくと金を取るが一せんく是もそち
れと多きとて酒でも呑むとトモロコシ税を済し
その小金もとらまほくおけい若さゆ下に助事と
そろそろ金を取る押取までゆくに至ゆり
誠後金より代吉吉房主翁より人役見了と云ひ改め
名前をもひ助とぞし西羽里とひく少金改め一改
是樂徳の事とへてもく従事か人官も有者否ゑ
と浦原善登と少金へき一助と主者と改め善登
と善登と代助ハと主者と少金と改め我を少室
之助とす助人の事とへつて何方より御きよ

金を取る所より仲間とお集り是ひあゆみに今日取と
一金を取り、有りつけ候アと酒肴夥々香酒へ
仲間によ振舞我も飽きて食一通半の食食
亥年四月廿日我よりちと頃とて而後我ハ一生は身を
居ふなままで今日は莫食してと世界の限りと思ひ
あつてとへ事たぬうれし小我をすまうてと
るをうそとてえ黙ぬとてうと書哉一返不直と
そぞく相手うそやけまくおまかせにくまとせき
主の助、死體を被りたまこと苦ち小引其ひゆ
誠後親方と残多く思ひ厚く、葬うるゝおま
植葉先生の後事辦作と載るいふ助身と
てえ天とく生れも同前也と難能のまに我身

ひきりと墨あやせの奇ひえと是ハ八角
の書とと妙とを少しくありては御ほむれ
否を清死體とすと嘆ひぬ。一也深く御し
思へばかくも乞之羅縫の殊不ふア。而序と
詔ととく人間小拘くまわい事る事を思ひそ
らん。もつともとふ。

第十九

情隨院了頤和尚

學へきりあへ小草透へと

仰そむれの接の深く

論語くわくとく透とゆゑく多く死た可をとしき
と死はてくを一々多うと生をとくと死をとくと

シテキモム画や只後世菩提の信心佛の道と
と教戒してゆつて導師と父をもむの多くとくと
高きく信と記しふか所とハ藏の命の強ひ
めども則經生極樂經の方とくと極手の教
有かくは了頤和尚と了頤和尚一代穿衣くも
幅絶縁を絶衣をもと了頤和尚一代穿衣くも
是くは多の重病をか。至後福食充の事。の後歿
遷化。す。怪しかば今つ五年をとす。京郊知恩院
にて安葬をす。まとうらう。死の日を知り

第二十

秋の音持かうす。歌す。次

青藏門人
羊素

は向へ甚威情をり。多子と申すや余れうへに、羣衆あり
御主とやすのこの内の後とて、そと同一の人に生ま
くとも一日の力よもゆくからず、かがむ心裏樂くひき
或を收ひ又は少くとも亦樂く。又怒ら様のやうせ
至り沙汰。一何年一日の内にて怒らせぬ肢までして
そまひをもつて生と思つて承る。本をせきて一日收手す
を沙汰にて思つて、こまかくもやうす有てゆゑく
恨みをも怨みをも。何年はるを経候も、さうれ
名をつむれ候とあくを嫌ふやうすも皆のまづ
ちく一日と多くへりと怪我要ひ候とぞ。経み向を
済ま不すく悟遂の内す。あへ一嘆ひ附焉。

松平右近將監武元

第四十一

程とくとく秋の夜と、暮つてなき

何世はつとく日くのゆき

毛を生えまくる清者半波口並びり。毒館林の場三也
在る。室曆七年二月廿日上師東殿山下。あゆみゆ
有徳院殿玄宗公の七日清忌。勤候してけまこと後
まく。公を重視する者へ目とて拂ふと云ひ。行は
月日のすくとほり。之當たふ。かくとく安が
ふ。行と無と思ふと云。賢者の公あり。詩を志
をもとて詩を以て自詠と。徳有のく。神と形をと
もあふ。心つゝて。武え子の篤実。自ら自
然とあまし。能とり御も又秋の夜と。沙汰事

う村の竹と秋の夜と満月の三季新しく西
向に重ねて木立の枝を方角としやく西丸
西と立ち下り木立の向へれむ竹と秋の夜と
木立の向へる木立の枝を夏をもふみる
あく者うそり月日のかうそゑく
よやく年よりは秋は早く立木の自生と
君をかうゆと度むとくらくかゆの
少くあくと海とくまく仰せとりそくもぞ
日暮のさうい日暮と名ふちと日のまろ
くなまく聖人のす段と惜しの心とこそ
烟と火といどうり一句感情深く东敵ひよ
美不琴と舞烟の類のまく鳴すとけり

笑ひの心を慈愛相称の名を

加賀

千代

千百千葉蔓

荀を美法使て和とて頭をそ清一匁の心
古の園女秋の木ほとく省うすすみりの浦
宿紫向のどりもあれ迷と只公可と生なり
鶴が音をさうそり老子曰天つと清とす清
地つと清とすそり老子曰天つと清とす清
唯と清とすそりはなく華爰縫と三界吹くと
法華にさき是が一佛家と經教傳説と一公法界
さり天台と吹く対相と語一毘尼かく常樂

一乞と云津ち門より一乞乃礼と云祥より一乞乃生と
之密相ふべく一乞乃別と設すり一乞乃別過すと曰四孝
主と一神をうけ候と別すり一神を無神事とせむ
アリノリモと別と五名の神がトヘ人形の
事やハ云つてすり思と出をと佛がト人形面をと
移すくは年代の句半七文字蔓一筋の乞乃をも
乞乃をも重ねりちどり丈死をして乞乃ハソルモと
法術一^ノ死と乞乃身をうすらまん御と乞乃
句ヒ吟一^ノ妻ハ丈と乞乃と仰と丈と妻と乞乃依
シ夫ハ世の做着者と有の戲と乞乃年老ても程度
の事也若と乞乃と丈と別すと乞乃と乞乃
身ハ身をも重ねる度と活け泥湯のと樂をいき
りて居西口一

シテシテシテ風雅と身と云せしもとて唐宋論
れども何と又云先不やとひも内と云て仰くから雲
をもととて云をもととて云と承の御一^ノ而丈死
一^ノて相手もとてあまくちの不実の云ふやと云ふ小
事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
乞乃老年不あらぬと云ふ事と云ふ事と云ふ事
あまゆもととて云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
一^ノて居西口一

はあをと元有傳の町人をもつて、支拂つまづく隠遁
れり。店舗は構つたり取付客の薄う後殊の外至る
富とゆきを以て、漫々旅にて頻く印とひよどりと
内にて女房の姿をかで、差へもれたりて、水玉室また
テモ財物を手にとて、風ふくびく旅くまくぬらと頻よ
たゞく女房湖にて、とゆく水丸と内へ入るゝあも
つゞく巴がれ、我身衣拂得く出そる當きく女房室
と括へ門の事とえへて、すくと右を通すり
我湖を意とて、とゆも書さうる寄主と述べて、と
ゆく我とゆきりとそくそく裏立て、かく足跡とな
て女房とゆ状させられ、知らざりしなむと、牛の
仙摩にゆく所の珍り、何とくね新うて体を表

はあと吟へたり、女房客色ともくじ白雲れやくよ
るをふを差し、あまとゆりつゝれ年後りて、訓陳
したぐの公のあらわしと、とぞくとぞくけ人の姿
をよしむらむら西り、君の唐日は、まくとそあはと
きとやの向とひきり、女房水毛づけ一首とせて、今や
かくこまく、ふくとせきは、君の者を、いそらハ不義と
改めく真實にゆき、至るべく教門の方

あくまで後へ行ひ多と深め、紅梅の枝而風の君と
み文字序要也根もり向たまへ西海のこちへ、西冬のと
届てまづ、雨の聲より母へとて風の聲をわすれ、父と
ひとともあ親の君と後へ多と深めと更されし紅梅
この事、身代を度よめく親の名とよむし室毛町
みて、大和とち車力あり、鶴屋に近便よりおまふと深
め、キタハサキ大和をそなまを多と深めともの
をきて、車力と高更あり、おまかに羽夕子行じまうかて
身代ととぞ多くて、ゆきりとち一時移りまうかて
は句のそちたどもそぞもとう所とらむとく
そく、而る。

第四十六

松平大巡賀監玉色

じつゝそア、植根の君、めめりんく
承知のよきとぞれまくと

け讀人多有経院様沖田行出頃上をまき、御老半左右監
すり家重公沖田代のひくがれ山登と義り、西をりの金安と
石子もとまじ、江戸を中へ渡り、被やの門のよしと西のきりあ
まし、古へ往か、多々と四附の添充ト音ノ、株垣根
幕もくらりつと、此、乗りの茎のよしと、後へとまくの
まくの句あく、西面へまき、幕も一室地すりしませ
余色のト、仰を半左右のまきで、門前と馬駕を
せまく、夜と、宿日小塔、被うり、船もいがく、
あらう川の宿せなれば、とて、我身の役へとて、まく

まの出立の長者範までりくわく一生涯必滅矣
附とあすまつて御説く義子よりまづ御老牛
役人を自己役多勃の下に坐さるが町家をとく承先
善後とくして役の不育一助りの所とく今ま
あらゆる鬼畜をいは友道將臣とせは年少を平めと
くもする所となりて御役門をの我候居とく至る
ち被とてキニシムノ龍はち重石の友源者をねば替そ
多番の長處とひ役を小見は主財の御子へ御限在室
石迎將臣とてし無事をへつむくと御監役中
役長とてり御へせうへうへとてとてと御監役中
詔すす賄賂とあまうりおれとてうりと田畠とく
くと漏すとて滿と將軍北御身歴て御限長をとく

御身候とて御身論方をかくは金色のととく
傍見て御討書をとくと云書と代りて恐後つてとも
右ふ行とも御尾巻櫛ちりを拂ふとあらうとて是れ
ナリウツトテ家重公の御用を益量拂ひて寫伝
の印を半なりとて御名君と御所吉宗公の御印とけ
きうちのには人ナモアの付志慶四鳥印附とくあらう
殿本とく御内通政吉良上所女と女陽とく一りう
教多の太名立強一に侍将臣をへたと崩えぬとくがハ
各の行と御身入るや御善代の太名倒修の面いから此多
聞の設備とこそ御つて若えの厚へ者充せまじ自身の後
の移ると相沿まよへてえれ一益量はつまうて差奉
思ひやまへてをうへてまづと相接する京舞月一

う。うの後をくねぐもす。家重公の仰氣よ達ひ
ト事一括りす。うりはおひらをくすりく生者
必滅余者定難ことくもすく竟て氣をくずし

第十六

本者庵老翁

わ思ふそく小暮もあえう此

は向むかえまく傾城こゝ者人の目小は塵と見るれども
の景もまづふくわす。物前くよひ是るからゆの附他
身は每すまわく。若頼徳宗女御の食を殊女御もる立
候ひよくひれ邊の門をうりて居者も時々つこを候
御ちあはれ西廻をわざわざまことに身をて葉をすま
候乞一日と二日あとも門のうへてねを半に度ひ又

幼少のまじで何とゆくかあよん露華絆もく峰
西のあらう始——移とれ日とかくのまゝいの内
病もと年りてあらとく鞠ね根つと慶門をひとの
の年思ひよて候をく——是世間もくくもくあれ
車にまつてか車てかとくやく——居まつてこうくらむを
御もまむもむけまくあらん秋の頃にまた扶閑使く縫ふを
仕とも寝のひすかはくとも是をく縫を爪くちと髪を
やし一文の縫をへりてまた縫りんと縫に事とをタ
邊もとをゆくとゆくとゆくとゆくとゆくとゆくとゆく
とゆくとゆくとゆくとゆくとゆくとゆくとゆくとゆく
とゆくとゆくとゆくとゆくとゆくとゆくとゆくとゆく

まよひ行多と面おかり通すよりつゝのとぞをひそ
うれを被せとて運命を有とす如即く庶流小彼をふ
本是庸俗のをゆめ終日一日の経合吾凶惡不づらく
而と内うちやまと敵氣を多く初に主へ思ふれ
やうな事のをすむかとぞ身がれ波とれて首う
粟と珍りてたゞく助代ソツツタカシムレ
少教の財物で差うそち息子の意をまぬ先の

第四十七

盜賊手札

進春左門成勝

只ひ川渓をまぐりの舟人ふ

しりあるはまほまほとす

はまのを京を代盜賊をひたまくが暴仁者ありま

善量實行りてあらまの氣味をも暴行け
詔書へそぞぞれのまへを憲へば其川うるさ
きとぞるよの句へらふ頃の有人のよのよぎり
わざとぞり舟へとぞかひとぞうじつあくよ
限とせのひととぞてソナガモ波は他に多れ
争ひもう害犯とぞ思ふる犯人を我も責めう
そぞとぞれとぞ波とぞまくまくぞりそり

又名墨子人

第四十八

蓮○止

精出ゆくゆふ潤とれ一あ車

は蓮山の家端歌へ長水玉をそそぎる墨のまへ人すり
うの向い高人風人をそそぎて隨ひ精出とく稼とく玉

金箔の通用とて拂うすく拂へて車れりくらふ
衣裳華美とて人を水車の至半に冰分て是故
とて拂りめり也高人顧へて詠えを士濃の道子も
同一すれどもこの句と約ひへ吟へてを歎き也

弟弔九

祖孫物存ひ先生

よのやまと拂りまくへく令を知る

所故の写ナリ一故風も有

は後人を教む事在周つて近世名多記傳者也頑學
多もせのん能知りけむせんかくせんかくせんかく
斗一ていせの牛ハ拂りりくをあざれ世三ハらむち
と拂りくまく、翁万々の者も其念をもむのと

みてなげまくういづるも無へ難一多幸と骨細
筋千辛万苦の功と積みそと後も勤めぬ也阿波の
鳴きのうきせの牛と鳴く波風をくわせんかくせんかく
入すくまく不骨陽毛を教戒せしむる

弟弔十

水产養仙院尼公

よのやまと拂りまくへく令を知る

是を基養陽のことをかくやることをも拂身もと
而て幸い是極とぞもぞぞぞぞぞぞぞぞぞぞぞぞぞぞ
の拂もんこくこく戎ふかへ一叶書経説尼公の御冥父
迎請殿毛慶元公の御玄文附一文昭院殿毛慶

内地裏に水を敵とあくまでせうふをひ
くらむのほそきとおとせりまの後もひだりと云
字傳てかく義もあやしと云ひて右をうる
らあ、身どもうもうひて、この事のゆゑも
あらゆのこふけうちの公がまことひとすもうらあ
うる

奇跡百人選上巻序

百人選目錄下之卷

- 第十一 古岐丹後古賴稔
- 第十二 市川柏庭
- 元祖 漢川疏考
- 第十四 和泉至源吉備
新物木町
- 第十五 麻布
羽翠羽
- 第十六 湯嵩
百左
- 第十七 麻布
羽翠羽
- 第十八 麻布
羽翠羽
- 第十九 麻布
羽翠羽
- 第二十 麻布
長者丸
- 大坂吉母毛町
- 本澤吉吉毛情
- 第廿一 芝
菊屋洁涼
- 第廿二 明石桔角
- 川鐵
狂言作者
- 第廿三 嘴月庵
- 第廿四 菊原斗丈
- 禪宗
毛利玄孺母
- 第廿五 無雲坊
- 第廿六 深井
上派盛一席長
- 第廿七 楠木至仁年法
- 第廿八 美辛七
- 第廿九 美辛九
- 第三十 美辛十
- 第廿一 美辛十一
- 第廿二 美辛十二
- 第廿三 美辛十三
- 第廿四 美辛十四
- 第廿五 美辛十五
- 第廿六 美辛十六
- 第廿七 美辛十七
- 第廿八 美辛十八
- 第廿九 美辛十九
- 第三十 美辛二十

弟七十三

卷八萬妻

弟七十四

清漪庵

弟七十五

後清室
榜葉先生

弟七十六

軍舟
絢多

弟七十七

家道青誠
玄道存義

弟七十八

女教
芳澤萬常

弟七十九

極星虛子房
豐竹陸井

弟八十

二山沐三節
中村蟹長

弟八十二

三張師
古近江

弟八十三

大藏佐治吉安

弟八十四

高橋秀秀
林太內記佐篤

弟八十五

大藏佐治吉安

弟八十六

林大內記佐篤
高橋秀秀

弟八十七

大藏佐治吉安

弟八十八

豊竹陸井

弟八十九

中村蟹長

弟九十一

京渡京
江跡
汝助

弟九十二

大藏佐治吉安

弟九十三

天英院敏一位尼公

弟九十四

大藏佐治吉安

弟九十五

天英院敏一位尼公

弟九十六

大藏佐治吉安

弟九十七

天英院敏一位尼公

弟九十八

大藏佐治吉安

弟九十九

天英院敏一位尼公

弟一百

大藏佐治吉安

歌絶百人選下巻

第十一

土岐丹後守頼稔

五月富士山へあやうす御山大のぼりてくにす仇名ゆきし
毛は東都而日代山朝の兵を文ニ年キ有陽キの兵を
安らう出でせりと京都の町人の口等れやうにてて済
公家危の化ゆるを接汝は兵事とえりてのみ相手
聞とお汝丹後の吹く笛とおとおとおとおとおとおと
四形目をもとと丹後の吹きのあやういはすり言葉を
とほきり也我をあやうす御山大とほくちかけま
ハ着つむ御山大とほくちかけま

篠窓と人より絶名といふ。口はほなとと云ひ、いのち
薦め不調法せり。とつて、廻らむと云ふとを至
たり不西也。はすり宣と云ふ。下れ句の後をも
かうむ。此書後半の巻量多く事半ば後半を委し
ゆく。卯老年の寫と詠をかく多く解也。是遂年根
も。序も本筋も多がこそ氣を毛丹するハ達半筋も
らくとも序も本筋も。卯老年の筋も。けんま等と
ほき部も解せしむるをり。左方に勝一人も。

第十三

町人
森田木主精

侍三下起て見る。小男庶のよれ裏ふる氣を有する。

は傳へて空手相撲の有沙の町人め。つ女御役ひと食飯を
まひ珍まととを角とを奢者。そ一家親類まとひ墨を
留めて見立たるを多と至れ。不く皆く十手て押迎
易代を取頬ひんがく。易代を取むよ。却一才を審公改
毛と上総の八幡山とを並べ遣。並々々々。伍やも奢
かりにひねり。ねど毛角と考否を教訓して押迎並々々
ま。さう本主精ひ。公精ひの、店室のすゝみの西へ門込日の
立てば。ほひとあの方のとひ。後悔。一候。身と財
の夕所。北半も。是を奢ふべ成。そ。さがと氣と先
ひとと若。一。うめり。渴く渴く渴く。小怪す。うづるの
教訓ま。うめり。或夜店の匂ひ。寝牋ひて。れの。身の。ゆく

席先勝ゆき席の意を表すやうな筆で本多景松を
手て取てやるが席の色ゆき我世をすすめ一時の友も
語りのものと申すが前席の匂氣のありて席の意を少しよ
びて今又またとてのうして席の色とゆくをいふ
雅の道あるものか山家も室もまことに有るの向
うにあらわす寫真のうれしきの席の席とよしむら西の向
いと感せり。お車出でゆるがゆく席の意と度
ておもふ。坐る者からへて小男席の如き大まんを
掌紋席と云ひ正月の月うて度をうつすやうにちと
あらう者へとて財清くらすがゆく時から一足でゆくとて
席のひきおり下の向山れをすとれ多みへとお
とほり。御衣冠相称してみゆく見ゆ度後成ゆる

西被ふの意とも席を写すうりといへば少くは見えず
主徳と信ひどりの豊人の極喜仰つてほきりひあ
はんへ笑ひて今いままほら意ひは國に改めると銀鏡
委く假の事無事。そのとくまほら故郷をさうぐ
おもせり。まほら故郷をさうぐおもせり。まほら故郷をさうぐ
おもせり。まほら故郷をさうぐおもせり。

市川祐造

人の四代種ともあらず程景うそのよせと初やへせ年
はまひ教訓役者若され海老翁。今の四十節う祖父
後じの多体薄く長く。ゆふてあらうよせとまへて先
考。まへゆく老母采蘋院。はまゆゆせり。城

さう又朋友の候と奉り承き後者といひてり川
守出世とされ樂多の役へ就き佐助湯の者す多
喜あらず幕内奉間を極め今へるに情とかげ寒
暑のれい財吉五歳くまと付に季節不と造りそ
上る長と敵をもつて出でる志入るハ孝並のをさ
人品之を傳ひに君を徳く覺君すくに聖代の沙
代より要特く隣を得るゝ事と聖代のやう守在公
連代とももく天下よ名と得し人あらり儒士を
御東南部春臺爐華の類とす武御達人名聲能
書りは座屋又山角力取すが源氏山柳子危根肆
閑の類とす教経者とい市川柏遠といふ日本を
やうの異國とす筆をもんあさり朝鮮人阿蘭
陀人乍らは生れて柏遠の先の根古御の一枝繪を
調へ役者といひて日本より市川壹十郎と云々古今
文政の活力者これぞる評判有りゆかと奉手繪を
大門所奉家父の所徳義忠也とぞひそひとせ御代
と南宮國より大泉源より友の隣と得るると因
そて柏遠りおれい母業を爲つ石仁ゆきとすと
ちくい彦羽助者をもく柏遠是と門子我株かよ
して只代目圓十郎と称す草軍印御と云ふ内妻とせり
今五代目圓十郎と称す草軍印御と云ふ内妻とせり
て取れり寝入へてゐるゝ喰入多用公と將ださす寝
食を絶くつらうり第もとおゆくとぞと喰入
さうへ思と若方ゆくつづき病氣とぞれり後

發も陰内をもと母の業をもととて
防そす甲斐アリ初遠防と氣の毒を思ひそゆく
初遠松とれど御尔も又へと初遠も冷方アリ。我
不肖の身アリと又とも平生おめり連訓の遠と
防を見合へと便日暮は黒髮のうと妻てまよ
枕えと浮舟今宵は空看病の人アリも心能く寢立
室より用公すぬ。母弟老るもすすめせ我も寝
きりと夜うつ氣分く失所さうと次第は快幸
せり是を以て法服不角、熱湯とて瓶と薬
ふと因一語すり挂へて平生れの瓶とあか
人の圓の程をけり。勿論御子虎をとあまくも
かげと傳うべく象と見合へ。其の象の女は黒髮
とて繫く附く事と切つて被つて舟に渡御く。黒髮と
立つまほはだり兼ねもすくと女は黒髮のうと
有と書く。詰ま本と黒と哈マと氣味も不仁也
太象の程をかうと歎くと角小對りて我責之少の向
ま黒髮と仰へやがせんとりくわざ黒髮と自由にとぞ
さと教多のくふをかくと享の心が少くにとぞ
礼と辱あ。我るも御くとくらとそり又と牛角の志
をもととて詣へてまわらひと黒髮の牛角を
不義い。者と知るも亦骨肉の充實とを爲
する則人相違はあたかく角と角ととせ高橋多喜集
の妻と角つてたゞ一付角くゆく妻は多喜と
は句と書あうと前年もと是を初遠りを稱く

母弟えすまくと有内前の事と舟と車ひびく
かふすあつ湯をも水のあらう川と溝くら是が世苦
の人の病多きよりと成り馬と麻もと呼むと
トモサの事と舟をも車の人も有主と至る
舟と車はせのすと手てとまつてとせと成り
タカヒとえあはれあへてまのよにうぢゆ拂
安らぎのまめの景えり丈を祖国十所へ廻り承
え年半二月十九日市村たゞと後既十二度作成次信
致セテ、子細方で松山才と名者と奔走まで功教
さむそり丈を抱遠親の殺さき一芝居の間二十
年来市村方へ行ひ毛勝母里と曾子寄りと於
うちへ元祖園十所へう今の中十所とハ代り

抱遠家の薦さゆくとまの根ふ門閥根間寒雨等
之連川壁くが良妻父妻といは東助六又ハ久木守
淳ひニ庸ち助京清男地そい意深門を掛泥炭の發毒
害傷至る御高萬の頃ありくわざと御一而他より
悲歎をもと太りさせまつておと多と召ねしたる
今園十所へ來ト抱遠、本縁有事卒役者の
氏休をもふる

弟六

望郷の峯と見せゆる冬の月

松井壹月

此宗通族のわ病ひ田原とゆり折後八月十五日の月の

先方に若根山と見ゆる吟をうる旅の列車にて宿在
すも望めぬ遠行と考へて川の川の川の川の川の
まうかと行里寄つて休泊する所と大慨遅刻
にて行けり要きものに行事の事はござり前度上
穿駆して立きあがれまく一室の計ハミ身に有
え日たか一日の計ハ鶴明とモ一生の計ハミ身に有
えハツツと歌ふことを車と船から無むせん車と
タラリと居候して立きあがれまく一室の計ハミ身に有
え時日のかくとよりは向望御と夢とと宵見せ
ゆるかんうけとせんでも是れは後を前ふるを云
古井の秀向形也

弟幸

深川路考

西うけの川の旅子松山をくわんと我紀うとくふらむと仰
は漁人とも言ふ旅役者女形の名入を組深川菊と葉毛
年辛酉と不う覺のひとて寝る山くそ一生女のまね
めて我事とくと見せをとくと嘲り牙持の世の人の
家内の者うと見せをとくと嘲り牙持の世の人の
旅初不くして旅者を今と名ふ旅役者女形の名入を組
魁とあく記せり小町の西の川の川の川の川の川の川
うと旅人を女形の腰かと旅者の中の女形の名入を組
萬葉と年と情と歌ひ者いすとくと旅子と寝て
ハのう旅者とくと旅子と旅子とくと旅子と寝て

人の如くわやまぬしと女紀附と我等の上の
老をもとくと御とれと御と人取女般也萬々也く
はくすくあくそくそく一女一年の内終とまくの
病死の歎見をもるゆうべりてとせお役内を
勤一時河内の薦井るく用帳をうへ菊と萬葉詩
寫絶うじ歩き付く駕へ山行と血の通つ紀と
と被ふくひてせりせり感へりり女形毎年活年
詔祭をもくづけ跡考より始まり今萬葉書
三代目六代目の源考はもと村万葉の事也

弟辛六

大谷十町

我宿く何く是くはるを宿而之紀方の送りがく聞む

是と考年後役者二代目の慶治也と仰されりと謂
者と與くも泥縄と下とくそくとくにすく西向一
是は十町の女房水をせし内謹一と女房の源某源房町
福田家とを書く娘也万幸の不稱役者件乃年候奉公
慶治り乞と廢り乞と行ひ是と云ふ事と云ひては
有りあればまく思へりと宿の内と仰ゆる事と云
極もとよの向をひせ下の向ハ浮舟と云ひけん養と
くと是もかくして神祇とねう、と免は慶治の愁歌
上り也多我の想言うハよどて身鬼え、滑りあり
男立てもいぬの生を傷忌舟志在舟つ家の癡翁と中村
奥樂と阿波津股郎の角力たるゝとまうり始終
相方うてたあり川原一の縁と云ひて助立即ちと

今一度落つ追手は佐野と角力取の相手せうじ
奥座敷へ行くと今わざわざおもへゆふ風を
老れぬ生きる者宣教今助の助と仰へ先助と仰
すい今度落つ沙翁町河原を金のす

第十七

和泉源義

起うと雨と風と小絆とあたててまづやうの暑
い後人を涼すむが前年の本番うてあら一体和尚の雨
露へうきと風吹くそふけと云悟透の場へば人遊名所
鶴今改名して亭裏とひき方付を京橋町角落合
の街くちかずとあけくねびくねびくねび源義とよる

簾幕すりうひと衣面のうそを拂ふは女郎と酒と
醉以外にうそ衣面と源義ゆうおとけまくらをすと
どくえれまゆうとゆく紹の人をくわ喧嘩と脚と女郎と
お脚とくま源義ゆうおとけあかんをうながとこと
へつとくちのうそへ女郎へうそで賣花あゆたの度一衣
妻をうそりのうそをうそとまくらの神妙と
くまをうそあくとくまくら黒くらうそとまくらをうそと
仰りて達うとおせり雨うそ陰風うそとまくらをうそと
仰り、女郎の高齢せん間を若和のまくら達男
と士農工商皆同一心もととめくら育せくら育せ
くらのうそとまくらとまくらうそとまくらと根方

着手へゆき多ひ若き金の草木より前まよを連拂
と拂りけり豊羽亭を去つて見て感心し紅葉
夕景の空に何者かと見ゆるが故にあがむ也
ともひとゑしに紅葉一間へ押送せんと多慶嘗ひ
て落葉をもはゆと渡らむと移つて三度す
してゆとりにほのをくへ西へ種金を経てゐと
まづり傍に女郎の身のこ寄りらゝの腰と放門
セイの紅葉をとそとの船を後を後とちゆき無
事うどと落葉のあれ他ぞ

弟安人

山傍馬肝 信鳥

狼毛人て喰ひふる寒う那

は向たまん麻布新町山傍寺内とある方にて名をき
流傳形也初の名園月と云ふ今馬肝といへり狼ハえ未
人と喰ふとされまと重車の葉食ふとくと喰ふ
是のとくもをあれ人て喰ひゆいゆうてゆせえ
と約出一等の金種とぞしと附葉を愈が
始まく思ひが生のとを約出もろん件名にて
之を金種をあふるとして約出てソシの金種とぞ
そよぶと中興おもむかげるとぞ一々いひ
そよぶとけの金種をあふる狼う人の匂ひを
嗅ぐと喰ふとて後続もせんと喰ふと
歎美をもとて詠すり口坐てあらわすとぞ

今やうしてやうれり我留係をひく件遂と孔門は
済うと見せうり件達と智魚なま済る逆すせん
智謀あらうと死にたる孔門と仲間はいづ
そゆくとせうり

第十九

新松木町

百太

アシテモアラム身も春秋とてもひそ身教ハアド

先生加賀を長き情を名手ひ男也之年林左寧改信充
長篠忠義傳と云書と傳とて世人へ出されましるを矣
五七三れ町を參済候松陽門親式用酒等くわ今人
取物とめ子久要友助とて、左へとくわ酒済事聞附

奇の葬りてれ石のあうとなくまう未を人ふすむ
毛被衣毛被か長寿なま世うて名のゆくとまに毛
被とれけあハ兼ねうほまくとひくとれむと名ゆく
は迷の下を止ち歌と云とぬまく讀一歌を
喜むと一生小不^トくへゑ從哉明之智承大瘦至及
の教え智^トとゑくの多^トる頃く長き病つて仰
源^トとち者をたまけ歎生^トとく平生^トとく所^ト叶
かの事多毛深ハウラ^トあよ困り多^トるも^トお色者
とて主人の内室をあうと金箱を目のり立^ト金
の多^トと明當^ト怪^ト長を而くお退^ト立^トセ^ト附
百太情深毛^トとて毛深ハ君の身の不^ト能^ト立^ト毛^ト
の増重^ト身と持^ト能^ト又^ト能^ト多^ト毛^ト運^ト立^ト毛^ト

往い中と主候あり。す小渡トハ事多トニ主候
て若キテト馬鹿ヒ利ヒト賢恩得失多ニ津テ
ハメモ度の松ハ智ムト津シ津ハトシ長ヒは近
トハ今新柳本町トヨ自ヒ金多ヒ水鶴ア町トヨ橋の
寒角の角和圓歸トヨカドリ津ハトシモテ常トヨ
海トヨ西モト寛行トヨカドリ不利益ナリトモ也

第六十

席席長者丸
稻 冬

本歌の至と若カニ水鶴ノ矣

毛ハ麻布の沙翁歌ト萬國行某トソリケテ鶴の句本歌
トヨウレ御之毛毛本歌ハ水鶴と矣の句御のゆく毫

毛リ而ル一毛ノアタリテ我ガの毛モリハ無矣
男ノ人毛リ毛ノアリ彼ツモリのハ己トヨアリニ四
毛モリヒケリ程壓シ被ミテ腰アヤシムト宣免薄モ
折リたゞヒコラ程モ重シキ毛毛不毛本歌ハ毛モリ
重シテ添ねシテ毛毛本歌ヨツツニテキスヒナリモ
時又男ア足一寸の毛トニテアリの祝ミテ腰アヤシム食ヒ節
毛モリヒ有毛ノアリ重シテ毛毛本歌ハ被ミテ腰アヤシム
の牛毛モ「我アミトミ我アミト」歌ニテ歌シテ柳の枝モ若
歌ア「我アミトミ我アミト」歌ニテ歌シテ柳の枝モ若
歌ア「我アミトミ我アミト」歌ニテ歌シテ柳の枝モ若

至の内中押出へ滑れどもくまろつ角地を
たゞとくとも夜深き雨寂をくわい水色の店頭は蓮生
角の旅の旅とたゞとく在室家少す十日のみ外
入移すにも多く清き泥壁の發向より移多く其貌
せり是れやつよく冰山鷄ひうりとするにて本家と並
きりモテムさりホ水瓶と多カくと本右ニ障る何事も
御多事たゞりを五年に一更に變して押出と名のを
此の何を表毛をあらはくたくと自慢と名を負ひ
主の終日あけけ夜は廻り廻りと海の水を魚水
鷄の表常とあれどもまた部々を日本に用ひて
漢文とぞいふとある風とて不用我羽毛不和泉式於
用の始まりあるたゞひくらめの向く毛を鷄の

すにあはれ皆のとよそ格く稼よどぐたゞと不揚
漁のとよそと收のとよそ徳意のとよそ收と年
子子あらへんのとよそ收と又とよそとよそ收と
之親とくとくとよそとよそとよそとよそとよそと
せ年とよそとよそとよそとよそとよそとよそと

湯宿
麦天

唐大和ねりうづる冬より

萬葉集のとよそとよそとよそとよそとよそとよそと
よそとよそとよそとよそとよそとよそとよそとよそと
よそとよそとよそとよそとよそとよそとよそとよそと
よそとよそとよそとよそとよそとよそとよそとよそと

鉄とねらひ圓せし物とあきづきとを舟とねらひ年年
て膳も奉帝やせまゝ女とモリ、官事比女脅ひより
とがひて自ら食とゆつゝめへ餓死する者多ト。我
朝うと相模の造木とねらひ圓くう柳の木年うる
度牡丹とねらひ軍馬様の牡丹もくじけ顔がくら
紙一け向ふとけい集うとくは書籍附すと見能の
つまく英國御船の見ゆせんと至と見ゆること
のふ無事と聞ゆ

正月
第六十三

素　嘗

西風かづ野ふとくぬ且可那

毛ハ芭蕉時代の人すり野かく意ふくね多の至本田網
の船わ船かくて序すなまき在船す西風斗波くと裡く
行焉る而を而一そく人候もそくまの皆候芭茅よ
更も妻子乞しそく堵浦も多候多候せ是をとくせ候
やどくらうるむなづ幸苦のたゆう隊かく多候れ
せ海うる車や多せくし隊行駒のせ活一そく乞ふ浮
せそあづきつみて瑞慶の營業和尙の船かく守
かくもと手ふくらうくそくはけ候くく津多のえぬ
あうり人里遠き而く度と活ひぬかの西行ほりま
すた〔世おキのサ株の申れ萩よしひらうトカクハ而く
ちうりを用くと山の裏をとほりとすあきのけの
聲とりとねらひ年比タクヒ怪の怪の声

つてあつて何と道理もへりまじで里うつむの耳
このひとをまことに見ゆてせよ跡の躋りま
すもうう身の處であらすむかと西風防まほ
身汝身世と詠るえむかと氣教一そまく

第六三

席布

羽翠

夜の雪月考者うがお里を

は角の冬木と高負けの山岸とこみみて叩きわらる
はるかに外をも通り匂ふる文字筆の香と毛動き
は春向ふと雪むれりとまづり候所と御子草の
鶯深の燕断腸の候肺痛かうどひまたうて却き

とと思ひまふとのやみうつゆて人ち相手をと
多う者天地の間よりうつ支敵まみれと打てぬと
然とさうゆめ目ゑるとよ稚え是だくさんくまうみ
をいとい形を不復有りたまけ毫端全まく打つて
居候者す候者行ひそが葉あしらま行ひ容るるまへ程
可をその邊すとからひの二字ハ放まをそひゆきてい中
育てらまうりのばくあんのかめのうつ筋玉とおもむけ
うう千辛も苦して育らまく泣うまくのめづまく
え學ぶ得矣の巷つゝみのまくわくとまくとお世をも
程すあり育とて育つざわらむれきたるやまれてお酒
まのうだくち行至夜未央不と居深て思見と居風

とまつてからかくもせまを呈御す。勘定との事と
出でまこと否ゆ。親の方かくもとくといひをもてて費
をもや今度は是地やうて中性をも付さむと云ひ
うへた。主洋様の事それの庵をとせぬものとあらそ
許格とづきを移すうと並程、前より少しづつ
あけた。終致湯坊長にててには、はるか後まことに
親の首に纏をつけてみな附をなす。一家親類も見限
果勘定の達をもととく。親文も陽忠翁八手十文字、
かくて差附す。今がままでりかず。勘定と云ふせば、親
類半とまだまどもと云ふやう。五年のうち、まづ存
うしたまじと親文傳の所存と斗る所とてと是の前日
のちゆまつて四時頃より月あつくりして東をも夜よしと

はよはよとらかうと寝そべる。不ぞ一寝も假りもと
泣き声ひとてくねりかと親の方かと親取門の於を
渡ても近き人多き者もそくとあがへ。張の外殺
敵の事もともうきつねの事も而て射風小つてわざひ
出をぬ日となく呼びぬ夜をさうす。はく雪をまと厚
積。重り折えあひの所存者めり今宵のことを思ひ
ふことにとくとくあまやうと寒きもの。親の因里は
向ふの文書所存者めうと四ひ切くもとすと申候也

はまゝえ文も年古故辰と名久右衛門と云ふ者家の家譜の
事より身後之左澤勤吉を承る。諱多の御子にて室金舎
作舟をより庭正を名されナシ人の御子にリモ公治長。徳
経の半小主とソノモニ主殿を名シトロモサエモハ佐助トミ
西と號シテ左澤勤吉。一ノ掌るハ法華經の歌手と
唱うるを經傳をとソマガシニ常とも云々又まゝ入室
セ。被之を御名を世の人とぞてつゝと龜を名シ我れ
と布洋の学識を全のみとあくまく腰り。まくをめ
きくし龜中のまゝもすうう常のつまご法アハ法華經の
方像ふと。三赤毛を取於一言法の文の心ヲもむすべ
をく吸一言の沙汰のまゝアヒト是とちて達レ也。

第六十八

新左京江戸町
上総至一麻呂

沖津波風の名を承り。江戸の社を下りて京との往来
是が京都江戸町の上総至一唐主身高五尺そね色者也
中連は金花里と云ふ印と身附して大恩寺ある。密々
國並うるゝ通ひたる一磨妻もよきとせ出一姫松の
心浦く行車花里と云ふもの少せんと終夕思ひ。妻一
名も亦かどりの花里も是とゆて妻をくんハ我そ
上総至の妻と云ふことを女房と呼なれば。自然と
くも却りて附引廊のそやうすく貴私あらまも仰
鶴名の社を登り。そんろとまよを怪病のまゝてり
くとがち極くま紅の緋の夷一くぬまに生た純綿

碑と曲渕中てうたひたりて一庵を淳名湯とす。主版
今ノヤマリトモる筋より本板せり別て才のむを出
走を亦至るなり。ものもが當年より中に多く才をく
そぶさりかを碎ねか者に我も見ん。己と尼とを參く
の人に詳集もどり。一庵坐てはまと優多風雪を
沖津の波立田山之紀の者を下狼の城せぬ重被と
而あく敗れたる事す。あくはて何れ。京とちかけた
き日や。豊草原ことへの事と。奈原あくくのす
金木を生ひの西宮脚と没せり。おと一庵をハ乃実をれと
御ときおのの神めでたる卷をくのす。

第十六

菊岡 治涼

武秀野も家より出く月見夜

是ハ祐田の經原菊岡若手書也。松葉書藉を伴ひ中も諸
國里人。後日不以程記。江戸砂子深泥袋をく縫ひはが
ま室賤書く。是即ち御書松葉著述也。け向家より出
てとくとく古手こゝく武秀野ハ月の入をもくらとめ
あらうかく。またいそひとほりとぬまくうぢへを
測く。花もくして時計もくじゆまく。初うて何とと後空
室を取。左に陽明川の腰もく西へ川越道越寄る。川
筋と走れ。右に高麗川の腰もく。高麗地百里。こ書
送をう。是と云ふ。まうかくまよ入と取れたり。三百余年
の前よりして東照宮沖仁徳くらうく沖溝せくわく

充満し 戦場の傷亡をけまひ一月も三万四千人の損失
のとなく多くは病死半にして自ら人わとあらず本轂
軍事の都合を一月を越むて次第ト田舎と關へたも
日本ノ都合と押逐れり門の圓の南をすり谷ハ所と
シテモ今ハ行之所をゆき御主處諸名陣旗軍の又
群居立候と食事膳もろくともすら承事者も立並み
至らうかと薄いと今ハ衣も出でる家上のもと後
ア治涼あると從して家もり出でる月足沙と向地界
今武を此とえり城街送膝わとう家サギー斗ニ江
より酒ゑの井迎水の四跡も今ハ人立之後をきり
それハ西軍皆古くより変化やう別して迎年の年号
衣被參あ食類もて恭年の下にヤ法事上多くあ
省ひて是の舌がもんじも多難一秀松公の時代
信親侯御折桂を終りてせひの嘉政へ秀松公奉書と
至ト文子曰來ハ八日家康公と御折桂ナリ其處ある
ア松の原ノ年日ア是をもつてちの天皇也是もて
主所代のよ野もとを勤めりてせひの嘉政と云ひう
事も一万石々と更ニ子孫を真世をある中村或那の傳
折桂主がく屢々年日入角のヨリ傳とあがく之小弟の傳
を後ゆふと用ひらるゝと亦おほ一札の紙とて御
て主本兵役お捕縛度へ云うりノ節板金経算するを終
うて綿の衣具と牛馬の肉お捕縛度の被と取く
押載を相生候是もてナ候此衣具とくふうりま
と経りゆうり一勿論キトとて考せん支うノ事の

夜具と出でたまふを以て將軍秀忠公御附身松平新太郎
君印脚へ於ての御戸へゆる事より御自身の附身を以て將軍
の御身と見ゆる所に御身見玉除松平新太郎及へて接觸をり候を
あつた根と田代をりて向あらむ之様あひ難い事の如き
にて夜食食事の候事と知へて候す海世と又人あらず今
の御時代は生れ合ひの幸也御身此町と更化せし
希よりある所と見てよの在すト然物者も居どぞづて
瘧氣ハ不リ一笠本締の夜具と迎ひみて本締笠袋は
笠革笠袋く町人の娘嫁れの付も脅牛小負木と云甚と
御主とへ戴くべしり今ハち假意あそびけりと左の少林
より之のう上代深の毒く毒く毒く毒く毒く毒く

びらうじと織出を江戸にまかの御多幸者入有硝子
の細縫をあらはほの朱こうずの竹縫もあり食わを
牛糞火をす腰舟をてんやわく度料はあり又至腐
とも厄丁いふとさうする因縁と解出くくの事よりか
かく功臣三層うち大輪とす際つゝとくの事よりか
かく功臣三層うち大輪とす際つゝとくの事よりか
かく功臣三層うち大輪とす際つゝとくの事よりか
かく功臣三層うち大輪とす際つゝとくの事より

先の大師所在室にてて澁野川へ西廻り船にてなまくせうへ
還河中行すとく深井の桜本に年次の方にて此
花の事と申通あう方よりされたり信にて室公桜本
重へる處ゆ様と寫させられしに室公ももとれをよ
嘆がましにすと申の事と申ゆ事と申行を於花本に年全
の花あり花の形くらり一入の目とあり牡丹の如く大
樹とふるゝと見い得る事は後うともばくと申したのを
詠歌ひくに年次と正月の事と高麗つてやうてみる
のよきよき花のうらうと見ゆかず而當夷とて白銀三
枚下へ毛と沖野城を今も跡とて年次はかた紙
かり内の者づくと見る迎節の者と用紙一物御用
者とありて有紙一け山吹の將軍旗印の上に載候よ
かくはあやうやく花もらひてひそむを取まつておれを
ありと林ハ勝としよしとくを素なきよく口アーベルハス派
トトの文字山吹を達すロナリニシラキムエの古
事記一はる山吹と能けひありとおもふとそよぎハ岩つ
しのむとくとく御手にすまく印の花もらひ
絹ち君の勝地の香移アモレヒと墨をとるーと花もらひ
おせじもれぬゆき紙と小倉百首の自信公の門くら
家の紋章をもくろく今て春の印草風とわくとくとく
字鏡のひはるい山吹くうたうすすゑなべととくせだう
然の花をとさうとくとくおはりとくとくとくとくとくとくと
天台智證院の圓頤者とすものと今ハ日蓮宗はとも

某年正月十一日より某月某日仁年治も先祖より日蓮宗が
まことに頼のとどけに花をうらとねせても不感吟といへ
一神の多きすなはれ西より花瑞のちかむる筆意をそ
ぞくえのましめり

第十六

明石 稲角

大いにうむ水とすつて花をか

は句はやうゑ父の紙すり漬物ハ上の巻をかく著や
不角の門寺とゆく粘糸ハ日和をく音を月日月日と云ふ言
の句とて不角と卷く所と呼んで粘糸と呼
圓すをうへたまけ深く多く老女のあ絲系茶代をと

脊負行ひ小粘糸と程て賣るるゝ日和あはれとハ世方に
く祐符あらぐるを及粘もかまひまをも日和能と於月正日
よどれひ丈と二光の掌の小がるく日和と於不別粘も
織の室あらぐるにそそもうち附西石角庭をぞんじ
句の實く形を掌の一句の秀逸の句とて不角流とそ
ほのかとくやまと匂く大とくひをうきよきあらねだ家
く限く水多きをとれく大うらとも水こ中をひくつふ
たり天帝への大才大あひ中には葉大赤ハ狹大いあら
善源のち物大さの大ハ才大く似く才大く御心と連繩
え仙のれのたとくと、龍又初を折るも才大く御心と
心色まく縁を一陽大とくのもの全く才の内石と才の
火あらうとみ出も大是皆地す陽やく赤冰牛の火石

の大ハ地の陰大ハ乾燥雷火ハ天の陰火ハ亦大湯の心火
星宿の火大ハ天の陽也。君火と主火の陽火或ハ相火
ト大さくの陰火の星陰火。火陽火。火主火と合て天地火の大
火ニ也。亦寒火。陽焰鬼燐。金狼の精氣の大ハ陰火。主火
あと燒も亦石灰相波多火と燒の香若茶火ととて
燒が主火。陽火とあと燒へ雷火ハ天の陰火を主も。亦燒
火の足陰中の陽火也。亦雷火。濟間ノ獄所模ケ獄城中の
立山御室の白山靈仙ケ山城ノ燒主火。砂石と燒は是。亦陰
中。の陽火。有り又火死體の血牛馬火中に入る。而して
主火。燒を主火。五日是陰火をねらわと燒は。是。向子
りて。是火の大ハ主火。學物のん。その火事。因一車の事
あと。中止。是。今。

毛利兵禍母

第六十九

浅見老翁の見一人と思へば。少しそうう身なり。うり
年暮までかづく。多角の波となく。脇もあつざのうと
張されといひ。差と財と。被ふと。己やまと。思へても。西教の
望り。川ハ小財小財。もとと。欲を。望みて。年の積き。か
とねの御。き。行。と。い。我身。そと。たまく。君き。者。く。たま
喜。き。海。老。祖父。の。死。そ。そ。そ。ひ。の。と。と。仰。く。ま。れ。て。あ
恨。ひ。そ。一。歎。く。こ。一。月。日。下。闇。す。り。に。く。こ。そ。而。年
り。ま。そ。こ。う。二。千。日。主。と。第。ひ。着。者。十。年。立。二。千。年。立
老。後。り。後。地。う。り。よ。く。を。行。て。亦。ま。時。の。着。者。す
第。三。れ。頃。と。遙。の。せ。年。下。ま。と。隨。今。の。内。と。老

あらとあひたま我是年まであくつづくはるかに
多のとくへてやうを

川越

別弟七十日月圓

晴月茶

草がくやゆくと遊一翁

松

是川越南町といふ所の地附の向へ「稻荷山」の名す
ある二町をねりすけの名をしてゐる是の園内に
のむく高砂稲荷山であるの名前をと後しられ
すがのひより奈良として奈良の公く胸腹のふ
りふりと一是室でね草のあらとまとひのま
わの疏毛教一ねのまくもさうとさわだをそそ

棄ひうて奈良の場なり。御里の居候てと
通じ行をよみとて五箇月ちうと一翁の辛いが爲
信多の猿もくみゆきのゆくみゆく

弟七十一

岸門

慈雲塔

寒さ取はるどゑく夏緋と燐をまとと沖津を破
是を禪家うそひひ氣透可く活宅して移行つ立木附
筋を一盜滅して是のへ禪令と出でとされ破また
うととあ一通は意を傍是と見くふと被殺く
まこと燐せりと燐可れ是のは燐かとてはまを
まくら漏石賄り一沙のこもつま一子をまつとあまう

而後見る所

第73

般若経
般若經

般若経文

般若經

いづこり世人の爲め思ひをふらひて身をもとめ
はまく歎仰發ねむ他者の我身のことを諦めへとせし
詔と云佛家也縁となりたゞへ佛と他もなまきも勤め
著の教法すくべく修らう他者の事を之る仁不至のゆ
處大陰を思ひ出でて謀叛を事と乍らそとも勤め
見て尼セイアサヒナガラ女形と云ふの邊をまほくら
往くとあるアト亦姪残ニ三度と云他者アキラキ
産みをうらむと云ふて、実の子も又食はりなまこと
アラムル叶たり

漢一と我本業を他者を以てまよひて、かといをも
行を引いて本業人の業に入りと云ふ事より、至れ
後まことに体ひ方を以て、若者とおと浮川行の身と
もくのうするをもと云ふて計文うやの身からまくと被
あらる程ももさす体ひ方をもとも御の邊と他も勤
め理くせんわく思ひを漫の歩き人情や他者の
アラムル叶たり

第73

鷹門八右衛門妻

麻糸れんわくもまうじつしやまのうとソク放え
け今ハ猶モソリテシテハモリ麻糸れんわくと

あつた事と云ふもあくまでも爲方へ對一公
主ひ是の付はせをそぞりといひ、ひつてはるを
あそひとぞうす。麻衣もくびとひうけをうながすと
如を主て天通とすの事の御事。

第七古

川城

活銷卷

初雪や炭の行舟と白くまき

是川城の鄉人のあだ玉文字と初雪を白と云炭も黒
を株とくりて白と云ひ居まうれ天地の間と生まく
との寒霜万象もとひ皆白く變して終まうれ
考へ見ゆる一物の中のおもひゆくをいふ者と有

とくや人を有へ一石と云ひ皆度よりゆきなり
是の本多頼高教のたぐい衣被萬物の種類わざとモ
修ふる皆白く今も人間の勿論の年をしては風姿も白髪
と稱め死を経て變むてはかくと白く埋めひ白骨三
かくさう一而後は人多めタ立秋而始ぬと云事おれ
と書いた後も未だと云ふと變してゆく事あらし因
枝葉盡する時をもくのもくとあくべーと根を枯ら
めく後も時々御名変して朽木とすりおとせらひ三郎
名ゆ一木と名づけ湯まで馬毛をねと冰でひかへ衣被を
ひかへて木と系るまで木床の上に浮かべて冬を
御く處の事と松年正と名とすりながらと活き付く鬼

まへゆきを歎か爲りとぞと空へ猪猪狼狽の類
そもと肩ぬり而年三十の白猿の猪の狼の無所拘る
事無く徳りむれしも年久て氣に附れど意を怠らむ向
い物をかみべし松年齢三十の白猿の頭の骨は必ずす
までも金毛玉を拂ふて人間牛馬の頭の骨は必ずす
つづく足下をけむよる文字書れりやとあまでも写つ
らるゝ御書と御手本の筆ももう而てあくまづ落つて
初て筆と墨とあれば絶てあくまづ墨はあつ自也
かく何とておくれてひきだして筆と墨と落さる
遣ひとくわざねどもどうく思ふる絶てあくまづ
をもとより一不け向の筆あくまづ

第74文

渡河春

鳩巢先生

春風子解ら冰の満する山の麓の月

是ハ室利助こそ享保十二年冬月家重公の御学文の
跡ともうへてゐる後河臺と居りまつてより後河臺
をもとへるが人所知らずとひつてくわづんと
りてくま風の初めからまよわの音か心のせぬと
和暉の聲くま風の風やくらしみぢうとうとくま
きう今冬の雪とそとて冬朝とくらしみの今とやまの
夜のくらしみの雪と月のかまくらすとくらしみの
まくらすとくらしみの又御書の段四月のかまくらすとくらしみの山茶

まことひのまひつらふとつかひゆうはあめをひき
相腰のむすめ後面皮——はを後面を新絹と始め
あまく著述の書そり見るべし

第七十六

甲句 いよ

我わらそくみて燒を據る所のあくを人やまに
是を甲舟降下す法身和尚もまうけの可逆腰皮
ト後めしき其株もいよそありとてか密縁をや幼時
佛の送くを乞とせし一公私は佛名と呼へ被ひ可せ
ど身蓋一きみへ神つまひとすをい成りぬる章半
考く多きいよふ是をうみてくもの後ちとわづかへ

御みて見若くしき額とさうて三所後一おなま
牛込木戻尾とソノ女あり井とち和や高麗安ふ者
ソノ白幕和尙くまもて是子佛送くアキラ着と
様く教へられまく昔旧遊苗奢梵里

今入禪林燒面皮

首ハ四里ニ遊ニテ蘭奢ヲ林火今ハ禪林ニ入テ面皮ヲ
焼四席ノ流行更ニ跡ナシ不知誰是箇中ニ移ルコ
トヲト云捨テ歸レリ四席流行更跡無不知誰コレ
箇中後

赤延宝三年六月奥列石川の役者ヲ大三郎と云者ニ御使
と至る。右後御所落石やの端石と云文印。大三郎
死後は古巣せしこせりと安宅也。すらめんと拵んことを
うるをかく。身をうなづきをあらわすとて今故よと號て

西と横て後まの力子とあて自らと改ひ

昨日在遊里紅粉粧 今日燒面皮入佛道

さを極て長町裏く度と経の経と云びたるは町
格而て、門と仰ぐ他より、門ひ多き

一あひ放と云うのそれと拂ふのねと云う貞女あり
あハ冰の匂の月淡く心も清きらむれうて名を
もくたそんぬうそううほのをかがれ後玄小卒
御く今いそやゑしと唱名くこそせてもうも御差
本の構夜のされ

ケ所くにぞみく遠む、拂ふの後石のくわゆ
妻女の手にても如く貞女あり傾城く滅々にまく冰仙纏
玉手す空角に生木をもてて、あ日く月を歩きその宮に
本の構夜のされ

あくまどへ女は三女の手にとひまでもあまくに離す
句と種を勝とすまゆへまくへとく

美七七

斗

通

青蛾

まよひせの半ハ氣くつゝめ傷の君臣父子支拂兄弟の

牛頭馬の勿漏のより枝折り十数く茎をもとくとくと
おもむきとてと能今を予丈とてくと身合の柳の枝よ
雪むにかくとてたゞのこく一生の別業のそー老て
あ朝とゆうととあくまく手と出くと手車かくは年と
手て終ふと湖の名譽の方代不易すと仍て人間

美本と省むるにせば行愁もすゑの歎ハ皆を
多く省むるがゆゑへうも全く柳もモキモモ
今日ハ雨ハ全ひしと思ふと背後ノ雲ハ星雲をも南の塵
一年中暮れニシテ風からむと心くそく行か角を
すもなまく姑姑従母子三つ門ノ報教院アラモト
モアモアラウミノツツヘタカヤモクラム世のことを
モリモリと書方トも風の吹きと行程の事あり

着セタ

麻雀門

花床

身六行とぞを残す一人の怪人のたけみ
是ハ新吉ホトセ全盛の花房花房也残すがよ送くと

それも人間も死むると傳る國丈とがくナ
望ゆくアラ春のやがりと秋の木の月
見立てぬ多の名跡りうじやうのちる字親せび
多へ花房と争ひくを寄きよ草子をもんじら
ナリアラ悔自分をも寄のゆとトドクモ一通アの
寄ももまどもゆは浮世とく行とくへきのまゝる町人
の息子五三と花房も深く別深室へゆくは男病
成る母親のが葉一花房の而細くとみて片と不
俊アラモアリモナシトモわい報すれ對面させうへう報
父をもゆへ一人葉一花房とあく書送りされ花房
風の傳うけ被と残して下の向れ今のはとて息を
残うのゆくのなげまくモマーレ母親のと所處

てのへんはお秀逸とてくわほのかとてくわひでりと
今は花房と別席とてふ人ありする四方とてすと
達人より江戸に幅射とし出そり名を祕してかまを
あらそひ

弟七十九

宗直
存義

お母御とぞの蜜脾食の事改を

是ハ元泰理との一家而のり多めに蜜脾食を無く
皮とたれ重えと歎うにせんと日々干て仕事重む時
是より山とてあわくわひ多く蜜脾食ふるる
くの外に方程とも思つたりとへばと見て人間の腹七

お母御とぞの蜜脾食を南より泣山より入手す
明き儀わづへと抜を拂ふとぞとぞりはこのの
向とて一日とて冬つにててし一年に至る八斗穿一儀
もと一人おひの儀の事の腹もお母御とぞゆく秋葵
移く山とてもと塵むぢのつとくとく物を上
至半より千里萬里と引也小恩おりたがくおやじま
のうか一キくと思ひ有人思ひと感て承劫うも深
とぞ一桶もみどりの内から水のをて功とも年つくり
てそ石をあて育むをかくもなし

弟八十

芳澤菖蒲

送行後各とぞの事の祝をとてすとぞの里と送りつゝを

此傳は三歳目若次第水を多く飲無事の女房へ是へて
一時うつと徐緩すと五日後死ぬを如くを日書きりれり
シテ死んで其を知らぬと云文字の人の多れども之を考
リタクの事に至るく坐てたまの曾子ハ勝母の里ト若
らばと云ひあり曾參參ハ廿四季の一人子也族より方見
寔と少思て名と字の勝母と云母子猶も字文宇不思ひ
不考れりと云ふ事へゆゑも主心にて是もあらか
亦彼の志怪あると感怪を説く

第十一

タミキ含むハアハハ法の庭

虛無僧

桂里

は角川三郎舟尼ケ傳の者にて暮露と御付途年はそ
がまくをもてて年は三十を越へトにわざと説法の宣
中也有りと教く笑い付傳ト向ひ吊はりと笑て乞
出せりとての唐子湯湯の邊にて一人の老人あり若引
魚網とねを含めしと教生と業うる魚丸と賣て主利を
もじり老女病みて死を地獄へ入り閻魔の席へ坐ふ
閻王老女と聞て曰汝人鬼トならず附善根の事ト云ふ
云ふとてのつまことうひひく舌をうちて閻王もと
問うてとてのつまことうひひく舌をうちて閻王もと
又責めておほの一滴たりとも思ひあやうづけハナヘア
汝夫殺年老ふとひきも善根を一も善根を一も善根を一も

恨みりまじきをうけまつて我人罪まことに附帯に主徳を蒙
てゆゑにたまくを雷打ともと徳妻眼とつるく怖
しもいもお手にあはれの極の下にかゝよおもむきに法華
經の説法あり思ひてそぞらめうめいた是もおも根よの
をうやまんがとらへ真言教まへりを放せり簡主まく老女
とおもこき微妙の不善根をりゆく令あり放して婆婆よ
がまへ云門の多くの飛人主地獄へ爲く苦しご様を
うせて人鬼へ度へあ活めりと冥友よはせ一筋の縁をう
入るゝ多くの飛人活をりがまと苦く火輪をもりうち
身小きへくせりと急剎那之間へ燒くまゝも體を
がまあつち活くとまねく死をすくのく間とねりゆきこ
うとまきり思ひと又大きなまつりと遊びてばら良かの

死生じふり三十日を坐罷へ呼喚して坐しもまづや口病や我
婆波多とお根とくのまづへ病経をせん品生まづと教
いて我一念とほきくを今は若患とあるととく地と例く
数多の歎華を飛人と稱されく因とまきと苦と割と含ひを
しとまこと一吐もろく亦とまの飛人の於とからまえり又
捨てて大輪をもからまと見くめ老女のものなりした
思ふと南安妙法蓮華經と唱へつゝ丈とまく多くの飛人
もつともまくみと冥友大いにまくとまく飛人をへりとすに
圓もとおもうと我慢の汝妙法と唱へ力の妙法の功力とまく
ねく祿のくまづくとまくとまくおもとの物とまく模生
ちくの法華經と見くまづくは登向の公園一而やと

某の筆草書の如くと併給く耳得いへどもいありかく
そひゆふなり書者之ははははははははははははは

第八十二 中村鯉長

春雨のつるぬえらむかく女中や見事男うやうや
是は丹波姫久美を御して今年秋葉山の女形や手本御用御
御手本も生主先攻考因爲て御參とせんと風流う
志一深く書ハ文徵明の風也画を一蝶風う小町う事と清
かきは女ううううううううううううううううううう
舞ううううううううううううううううううううう
女形のうううううううううううううううううううう

豊竹蛙井

第十八

馬代少佐代と毫たる一物の行者うかあまく、ままで
是は伊賀町あや渡す吉永の庄平豊竹肥前様のニヤの以
前よりと四百月と引て一をまく云うてりとくのくとく
らは奉行職をとくに生きて年々不才人あめアリ年半の
氣質と能効毛うは人は年よりてせばまくあくと新夏
とく一者と思ひ清一もあせの後うて勝也殿が様後三
年奥州軍化と語り一時松原八重丸と語る者てはま
しの事に在り所の是がへおおおおおおおおおおおおお

落葉を食ひて吃の功臣となりて大幸り又お湯町へ出立す
とおれり行方へ不祥事と嘆かへ小栗利寛車のりもと後り
既に老る一馬は廻戻と始一財駒を以て下駄目のを食せ良
き物と詫びまへおからと駒をまよてちゆうは桂井の老兵師の
名へとて近き人天意とすをあやしめん黒くかく色の洋机
まくら津端理の風一御別て今流落と浮舟をまじめ船宿
を功者にてて皆人の極力也船の危きる人ふれまつげ
匂い見ぬ方れども之とて老兵師とえだらうと乞ひあはる代
のむ、我津端理の老兵師とあら代の老兵師とえだらう
沖新とて今日老兵師と相處ともと夏かく思て報恩謝
徳の心より君の代えを代とまわり何とぞおかれ所を乞
くことへとまはるの老兵師とてひだらうとくとて原せらる
老兵師を初めはほのとて當てて多く死をり

弟八十四

二山源三郎

子孫のとへぬふ野邊をあきあとしに初よの世子牛
星の法と命隣家と兄弟中行へやくもとあひ口傳笑於
のくも居へば多く多く見ゆのく吟きもとをこゑそもろ
一ノ字へとくくせと論語と有りて兄弟中腰交せと
のくもとくもととくもととくもととくもととくもととくもと
あれうのくもととくもととくもととくもととくもととくもと
とくもととくもととくもととくもととくもととくもととくもと
とくもととくもととくもととくもととくもととくもととくもと

而くにけりとて勝一の手の音の是もとて兄弟半族
弟の子がむけをせば徳なり

第十八

三絃序

古迎

世が牛の月を花のうるまと名づけのひの音のう
至るに徳源寺の名へ古迎にうきし行事も東へ西へ不
肯能ゆく都へと莫れとてはを名と消し三徳源作
とれの裡人の名とぞはれを相あとてはを較す同
ちより是不勝くニまして三徳源の名の内へ一つの名の割り合
え走せり是私事多めくは移目的妙りうきの音と洞へ全竹

凡て徳源ハ三三脚の京と云ひうきの洞本へも叶えぬ人傳の三徳
源寺の梅をうか一二三のまつりは至る年へ古迎に、サギを
三番せん、樂等とよきゆゑすをゆへとハツの音色とミナハツ
の明とハキとづけ、迎はて射くはげ云は甚自慢のゆゑて
毛に毛身と云ふく凡種くはく者に、こゝとわく
い、他とす、うそとうそと莫大の恩へ自慢と云ひ我事も
仕合たるゆゑ、近く見ゆくも、參るを自慢する、ハ我事
をうそと自慢たまつて是自慢くあはせ、於く昇下繩道の
御とくと我相もろに心を庚生うと冬毛遼々平原君へ
匂い自慢やうの史記と見ゆ又銷毛圓う漢帝と向く自
漢せりと前漢書とけり李向漢の朝宮とあらわひ妻よ
夫よへてうらむとつともううしを方主く敵とて対

見へども補註の徳とあつて縦と横とあれば
自慢する所の在るの事か。終始是等の假ちの自慢と
出でたるものではあるが、自慢をもつてゐる。我惟言
三集派を云ふ事は、少く少くの事か。我惟言の名小説
八編と後序の而面のしに、自慢ばかりである。

第八十六

人盡絶滅する正妻

聞人の如く小驚く事。鷄もからぬあつまれば考
已うおとほくまわきの事とあく思ひと見て鷄もから
ぬぢやめぬやうに鷄もからむ同一句を一番多く嘆の
れたりとぞうなへども、又千萬をきくもあらば

曉不旅立の者、鷄の事とゆゑまくの別離とく時をすら
鷄の声と恨と、伊豆の後、後、冬のと詠した多喜菅公代
唱ハシモアシテハ、あけとよみあけと鷄とよみじるは同一句を
意のとて思ひのとて、遠ひをせせくのとくとく鷄をよみ
みそ詠く事なる程面の——

第八十七

讀人御歎

藏本とく神下、洞のかる時のそれともうのよ
草をもぐる大名親類の、うすい匂氣のよかと詠年れ
ある四三と云ふてあ拂へ、草をもぐるの時も世も拂へ、彼
の手の上をもぐるの時も拂へ、草をもぐる自分と今とを

相馬湯を貰ひまうと親類の様子が
驚かれてゐる事と向の用のことをいふ代まで
はなはだ多くあつたのである。と云ふと
元年甲子八月門内を駆け廻りて福島に不見を教へて
新一さん石原さんを傷して付さうと日が本八日又水戸
老圃を出でてその間の吉川は又舟子連を乗せ
の船へ入るの風景へ会ふ。その船は「足利」の是が西後
門内を走る馬鹿橋成島へつむす。海諸名古屋諸郡半津
門あらそとれりもり石見を方々親類の所泊まつた。おの
方十人十人まとまつての水を公らうじゆめにての船詰の仰
刻ある。と云ふ。

筆者章は個人のものであつたが、方へと申すといたる
西門の内へ「馬鹿橋」を車を走らせて、成島をくわまざるとして上
落候す。進む見事にひきこもつてまづ福島の脇の小
村四のやねをまつての腰をせめて、まづ付とくと満とまづ
我の馬鹿橋へまづこよし。終りて、まづこのうちの事を
刻んである。

第十八

高橋玄秀

少しづつ春の暖きゆゑと接觸する。いよいよ公もつまよ
至る所處で往來せし者も多勢して、上り下り生氣一病の爲
と云ふ。かくはまだ正月の娘若狭と秋の故郷を危く思

まくの説くを必々と聞く。行要の不病部
生もとをかくのもの十保書が一まきあひ二年を経て
う済るふの不病とえども、立すら病と聞き済るゆけ
身根と見せしも、始よりて笑ひともあ親も久し
かうて娘の名の歌を見くちに恵めたり。また門へえ
氣せしとえ何ぞよきはりんやとて後うけ春とくの
万病画春也。能むら者く年へゆかぬ事くろきの
まとねうつと病ひとと成り保書と見てとてさく
めうれ松風に喜びてと音ふ五つそひとをあきてと
是れの事と考へそと病くし教戒り。あ。

第十九

石井貞鶴

宿門のうそおどりの寒

至る旅の時宿門のうそおどり必泊あると極て多々
あはれの事也。家若森等は勿論脇邦などとぞくく
もくの宿門の二里十ニ里と遠く出でまくとこれにモ
近本ノ宿のあやうく、まことに十破と根をも高望す。常々
まじりとおりと、よしてます十破と根をも高望す。常々
禪すべからず化かす爲めに思ひをもと思へども事すを
言ふまいとおもひまじりとれもおほきもあれ。まことに思ひを
思ひとおもひとおもひとおもひとおもひとおもひとおもひと
ゆく。吟をもくはまかはまく。意をもすめをもすめをもすめを
ゆく。痛い被當でもいふぞ。壁あいこりくもすめを

手あ給はとちの日と裏とすとまよまたと
あそびつるるに因り御食事と膳とひくら
書をやの体をあそびの不肖なりけふとと四二人福を
かうへりかみとをめきてくらまつたもとめぐら
をひとてとすとすとすとすとすとすとすと
ほのむとひととすとすとすとすとすとすとすと
月の車のせんれと思つて踊のまわり多く旅年とくを
客内すととすとすとすとすとすとすとすとすと
いの處のれいのれいのれいのれいのれいのれい

弟九十

林大内記信篤

人をとせ候を活内のうははとうはく月の活がくと
是きとのせ候者とせとと活内の人をとせ候誠にとくと
日月の隕と隕と隕と隕と隕と隕と隕と隕と
えくと隕と隕と隕のゆ件詮と我の件詮と一意連と件
詮と我の件詮と我の件詮と我の件詮と我の件詮
智勇と件詮と我の件詮と我の件詮と我の件詮と我の
あり赤件詮と意連の目とくと思ふとをとて飛ぶ
ものがあつまじとあつまじ件詮と我の件詮と我の件詮

弟九十一

星居代僕

役助

我ハア次ノ件ヨリ行ふトヒミテ三事の件をとる

九月既望士祖昌死於南歸人之至是半夕瘡毒
之勢甚急身半死矣業用之不果不終日之暮
有僧來看者曰汝何不西歸乎年三十多亦而
人至人至不即小也多矣不一星夜也多也
不二日而後人之往全恨乞丐之廢活而死
之是漸不復可也捨棄也莫人妻女之去而
迎其活也多之恨也。幼少初生之日母之死
當時救助之例而行之十載多矣每方之病多
終無所之多是追是那也多也。多也。業力是
不也。是不也。神佛之力也。多也。多也。是紫
成邦之多也。病也。是邦太秦の業也。多也。是
半金と行ひ。是不也。其驗不也。不也。成邦一首の事と

嘗て手引如何と責て人。南云萬師經病患除之笑引人
彼身半死形名不動。是法病患除之萬師之笑也。人
頤又之戒之。戒之。戒之。戒之。戒之。戒之。戒之。戒之。戒之。
病病之。病病之。病病之。病病之。病病之。病病之。病病之。
心と素一。心と素一。心と素一。心と素一。心と素一。心と素一。
蓋主來視之。而。村而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。
之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。
病。病。病。病。病。病。病。病。病。病。病。病。病。病。病。病。病。病。病。病。病。
身。身。身。身。身。身。身。身。身。身。身。身。身。身。身。身。身。身。身。身。身。
一。忘。忘。忘。忘。忘。忘。忘。忘。忘。忘。忘。忘。忘。忘。忘。忘。忘。忘。忘。

以管達のより首比駿山の実修正天子ゆ脳至金
の出で得て至まくひく足迷車とをせんく、年月一のふ
向門のゆく乞食と見ゆる事と外にゆく事とされ
駿美修の車より先下して彼乞食の病と尋り人佐車の
人を尋ねて其が車の運行するより早く車に在れどとされ
ハ後も彼と振ゆく所とぞりて万葉の御との脳より
名醫曲藥至取持す所と云ふ所より各原復
傳ても詔と無せるものぞひき病へと云ふて治つ
看病と云ふと云ふ事と云ふ事と年月と思ふと云ふ事と
救済と云ふ事と云ふ事と向い神とつづらき事はて
モ多きに至と傳へて救ひと云ふ事の後へ乞食
改と云ふ事と云ふ事と云ふ事とありひし日怪にて
沙汰幸に渴くとすけまく信ふとくを被く旅せしを免
縁と絆のと乞食と乞ひ大威徳明王の秘法と傳へて
主徳車に在る年月五月一也文亨釋書少も聞つめり
主と云ふ御主の縁を喰ひ、不くとも御子と見ゆ
仰もゆふひをとく責めて致物は差守れ事と嘆む之
は主徳の妻女は空腹うるぬくも、云ひてそらか僕
をうそひて云ふ事と初ゆもなむことの如く年金一
石を出で、浪へせしと云う汝也特修と見ゆべく
通じて志ひやう

象山、さうものもあくやつて、まことに、かく仰

新吉京守何等自相矛盾の瀬川入り是を西國稿に重登
る事の実経トテ後先の弊り渾々人間と長病より
惱一はか歎の多と自ら不思むる者と云々者を後
改名してこそと名付へ音のさく被國稿少々其と共す
出トがゆきと拘らず候ト故に「善假」と云ふのゆ
不従に出自の名無れ厚きつやうたりより病氣が
平賀のゆれ此の義理といふを「既」候と矣と
考究した所何とぞの而多くて誠信の事の如きは貴様方一
てをきづかへ送るれど西某と申ひては御多忙とぞ
あくまでもおもへどもと云ふをもとより多き煩悶、

往出へ三代目の瀬川より

第九十二

京源系

右脚

さうもと金形イレギヤモト、赤穂、いとくに是れの意を承
是もと道と述懐の如きう曲偽の内家假に至れ和歌と
詠りかわくよくあくらぶんちわ石幸と詠じ終り
是な他怪の多本のよもよもとと渝ヘトシのう者
名もくして或付其怪の花と見ゆる小えい峰を左
勝を花壁是花中のみすゞと是不改名トナヒトス
是近ハ杜若ミシテナリ或付、隣舟在多の高麗肉田三番

往出へ四つ速行ヒセラ財主腰石幸と様の

まほく橋へお出で我弟がさういへ様と四人へ在連され
船とお出であれりとあつておゆふ湯と女のかたを
着てつる角の毛をすくめてやうめふすく井戸水妻へ
そぞれを多く身をすり速よりけむと同くせすと
ゆくを背ひと教きを拾ひたるのうへ石巻のちせ様
よして西風をかねてと云ひよを安とむと感へと考
信も牛久須と吉川へ開拓したうえへとくらすもかづくと
同一と後一と洋絨の牧王牧女とくらぶ似たり

第九十

松平肥前守忠娘妻

一子よ義か代養ふ生れせし我思ふ事へなむけ一母外
は唐人を將軍家治公文文二丁己年育昔日拂經を差し
け四乳母と生れしを竹か代也と入所名小姓と称す
中とちきうをさり一子と千代と義をもるをものゝ義
の字號の尊きの傳とひづ「男の方へなむけと乳母のゆ
ゑにいまくらの移南やとすやとあまうてとくのとく

第九十六

系雷公角

我思之而寫之而至多之及中日一此書之以是
事之後在多有之亦寫之之多一西固多之

心多るトえ年は女ノ如レ自古ニシテ多小節ト
乳母ノリク我主ノ幼子在室ノ中、怪事とさせキセキ子
相見らう。〜〜か浦トシテ、多難無事の事、
ミテ有り。多の後を解元人トシテ乳母を解せしめ、死
ミテと出家をせし年を終タキ。乳母ノ不個法もリ。死
ミテ御身の主を失ひ、乳母とシテ年のみを失ひ、
身と失ふ事も主と双方より相見り。退室の時を
乳母取て、主と身を離れる事、陽向川流域
水と川をもくらむと多くて衰へ、それより今
西の危とぞあり。

第十六

芝面因明町

ま津

ちよの草木向づけれど、清風よりのこする
は者之薦の身たゞまも、身わき思術を功見せし草
女を。仇名とぞんともあらずとぞ、そひて、おひに聞う
唐院の例と見せ、有ゆべか。〜〜かわらゆと馬場
又耕武兵衛佐藤とぞ、書く載。〜〜かのせんと見ゆ
仇名せし方、草院のちよのあらわし、清風より松風とぞ
わが名の草木向づけれど、おひとぞ、そひとぞ、おひとぞ
おひとぞ、おひとぞ、おひとぞ、おひとぞ、おひとぞ、おひとぞ

隠奥のまゝ御花候ゆゑとたはひとも見よぬう得
是ハ御多の改進在事つゝへ多きくきの富貴の我身の
上と隱奥のうへる花候りをも一生涯と高き小
善とが因生ひし尋未て見ゆといへば何事のれ
吾弟江左海老事の令ひと云ひ松葉とあらう訓練一
之全事は洋五萬のうへ度かず初改進く至て八年物
く節何年妻と成るといひ望一時隱事事は
事とよどて全山へ送り小舍思へり後こそ告一
印の付く所不至地に化の妻と名もいふ因縁す
け事とは卷二の事もいふ所と云ふ事もあ
いかわくとる所なり

第九十八

高井天祚印南
菱原信隆

散
卷之三

極くその様にかういふ意味の要席のことをあつてはゆる
向松がつまむことと云ふ御前より是とあく人间一生の
事と多きものかと湯屋のひつかみの多めの事等を久
くもせらへ五度り是を教へておはしきと乞ふと
考へやうやくをうけたる後降の御も附り長くは煩そ
なり只西海へ歸ることかん人十のものとすぢあらゆ
可也韓退之と云一筆

春の夜の後も経て今世の年に只やまかと因循啼泣
是を御く國母の少保より候せへりニ異端毛衆生悉
是を予也と釋るれ全言是が世の年れど一切され
よか不候と仰へ思ひのゆ公の内山へあらゆてあり
のべ夜の能の事と思ひそりて申公門へて候
第一のうみのれづれの卷帙の例へると

第而番

宗直
季吟

岁在癸卯年一月晦日の筆ひ紙

は季吟宗直之序を序ふて候す和絃拂れ芭蕉桃青の聲也
絃拂えの辛苦つゝて爲及程もくわむすめ代田
植城を因のよとすむり候て芭翁もくばく桜井佐年
テ工唐箕小樹儀へつとも三宿圓へりあつま候矣
御きよみけく少くてもうひ令たひ楚よそひ波音もくと
賀年に令すて経て候よりくのよんがくすりとせうと
ひく是近百姓の傍りうとうとぞやあく西校とゆたう
とおその一食の事ひ三歳の内一日もなみて立ツ一四の
みい兵士の民のえを含むり食すの多寡もくとぞ
圓鉢と海舟の鉢と人馬の億兆のうくまでとぞと候
是と活かんくも候と至るべく人の如くとぞと候
のうとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞ

久きにとてよきとよきとよきとよきとよきとよきとよき
食ひぬけ行ひる稼穡の艱難と初まつて國公の侍
月流すあり九月衣と役く一の日咸角發をり
二の日栗烈キトリ衣安得、行ふり年と年んやこの日
于粗取口の日趾と舉く我婦子と同へ、彼南畝にあぐ
ふ田暖らむるに餾婦ヲクルヨロコブとの事アリ是國公且玉彦内ニ
りすて秋農業のと田ひやうそくちのと申諸
序思つゝはゆのゆくせ月の暮の代のせりたゞ牛柄半
月建カナス八月壬午今のすりへ流火と見ゆとくを大丈
心をもはるす育ての留みハ地の而見へとくをモ月
のタムカツトアシモ西へとあるまろす、流火とく
堯のゆ付をはる、中夏すくの留り、南小ぬもり國公

の四付と一千石又餘余年ナレハ歲差とひよのゆく
ナキを後退くはたた早モセドトの暮とひ改め位て
はるをすりしとがる洋とソトとえ大早の西(け)と
見て背トと御くナリトお降ミテトとはをすりしと
哉君の氣れ解さるも、多せ用とどもしむ行ひ
けくをまでもなまれあくびあくびて名もくらむ
へ人痛と頗てあらざれとのと頃もじゆくかくと初く
まくのり布立すりや難ても多くあをひる
筆とぞすり流火、早と見て感もくすりとくとくとく
多とらふと見と見と見と見と見と見と見と見と
也半柄あふ建一陽未後ノ日ナレハ日引て立月
ノ月の付をはる月未ニリとせり咸角發三國

二日の今三月十九日牛柄丑と達也
ニ陽のリと寒烈とい氣の氣をも風を吹く
もととして肌の氣と氣の氣と衣と衣服
のもの福と毛皮のぬくりの衣福のあまき
あはき氣と涼と年と経新と年と星と徐々青
流れありなり色と極くのりあらむる二月より
あるまく色と極くのりあらむる二月より
汝と汝の日うつま日年の亨と牛柄吉と達の
月入りゆく租とそぞの農業の通算とあらま
五年と用事としのぎの日り今二月の亨と牛柄卯と
達の月と無難に達と二字ハ月の右に引けと聲見る
所ちくふとへ思ひとへ思ひとへ思ひとへ思ひ

足とひげと脚と手とくつと踏込ととくねあらむり
易の二入ト郭とあらひ是之御の農業の通算の聲あり
今日午とて年とが御とかげとたるやとあらひと
馬とえんぐとまゆとせんく耕と耕とあり年馬と
形とくすとくとあとを首と上面と毎年仰と中四
一年体とて仰と牛田ハ二年体と二年目と巡り
仰とくすとくとあとを齒コシとしとなく今ハ工中ト大ヒ每年
作多めやと多く用ひとま多く齒としと
ひととすとあちと田細一せざら地主と今人あらひと
あらひと田細一せざら地主と今人あらひと
あらひと田細一せざら地主と今人あらひと

我帰すと因ツテ彼の南畠と鑑とを者

此卷之行て仰くかと病くせし老人極艱不と
至所と極へ思ひて送る田畯もと喜んで村の長老を
令りて他ちぬなくとも者を送るべくも相手れむをと候
所之國公眞にりて農業のよきよきして然怒しのい詩す
猶もほの一滴もすくめどもとし年中の旱れ幸若も
出来秋の豊年と見ゆる其の怪しき所す後日も幸若も
幸向なむの卷を極くとくとく

古事記の民と行焉ゆかと本外多道の風と経せし紫内と紫内
と春柳と行一百人選の多と目かを書内

寛政十二歳次己未冬十月中浣乞需西瀬王母園之所藏
写之

鶴多川漁人境齊

文政元戊亥年晚秋去二東海道若狭驛巴至郡有馬

備求写之

米倉雅光

文政二己卯年四月写之

秋山元直

天保十子年夏西月様井良人信写 小方太虎

天保十二丑年春借用十月写終 但身寸照大く少々空

五印

坂本千里書寫



42660

卷之二
今又復去而來之者其才子也更甚
也復何辭也
五輪土之每年一會詔書小日月掌其事則每一年一會
去來其勢若此也又其事之急也亦如是也
參詔之年又當有節期之時也小至之歲
又知二月後半以日月之數也
詔書之年又當有節期之時也小至之歲
又知二月後半以日月之數也小至之歲
又知二月後半以日月之數也小至之歲
又知二月後半以日月之數也小至之歲

